

海会寺跡発掘調査報告書

-埋蔵文化財センター建設に伴う瓦窯の調査-

泉南市文化財調査報告書 第41集

2003. 3

泉南市教育委員会



序 文

本市では、平成元年度に策定した第3次泉南市総合計画にもとづき、歴史的資源の保護と活用をおこなってまいりました。93箇所に及ぶ遺跡などの歴史的資源を把握、保護し、学校教育や生涯学習への活用をはかることで、市民文化の創造に役立てるというものです。具体的には、国指定の史跡海会寺跡を史跡公園化し、関連する博物館を建設することで、学校教育および生涯学習の場の整備をはかるものでした。平成13年度を達成年次とし、平成7年には「史跡海会寺跡広場」を、平成9年には国指定重要文化財を展示する「泉南市埋蔵文化財センター」を一般開放するに至りました。

このたびご紹介する発掘調査成果は、泉南市埋蔵文化財センター建設に先立ち確認されたものです。海会寺跡に隣接する地点での調査で、海会寺跡に関連する瓦窯3基、木樋や「寺」と書かれた墨書き土器などが見つかった谷地形などが確認されました。貴重な成果であり、当時の海会寺を知る上で欠くことのできない資料を得ました。今後、発掘調査で得られました歴史的資源の活用を行っていく所存であります。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせて頂きますと同時に、今後とも本市文化財行政に、より一層のご理解、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

泉南市教育委員会
教育長 亀田章道

例

- 本書は、泉南市教育委員会が泉南市埋蔵文化財センター建設に伴い実施した発掘調査の報告書である。
- 本書は、調査成果のうち、瓦窯に関する調査成果を中心に記載している。
- 確認された瓦窯群は、調査終了後「海会寺瓦窯」という遺跡名で周知されたが、本書では既知の瓦窯群との関連性を重視し海会寺跡として扱う。
- 調査期間は、平成6年12月8日～平成7年7月22日。担当者は、岡田直樹(試掘調査から調査終了まで)、城野博文(平成7年3月から瓦窯5を担当)、河田泰之(平成7年4月から瓦窯3・4を担当)である。
- 調査および遺物整理にあたって、以下の方々から有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である(五十音順・敬称略)。
後川恵太郎、有井宏子、有井広幸、井西貴子、上田睦、上原真

言

- 人、大脇潔、小野山節、木立雅朗、駒井正明、近藤康司、芝香寿人、芝野主之助、渋谷高秀、鈴木陽一、高野政昭、高橋克壽、伊達宗泰、中岡勝、西川寿勝、菱田哲郎、日野宏、広瀬和雄、広瀬雅信、藤澤一夫、藤原学、尾大輔、堀江門也、前島ちか、森郁夫、森尾直樹、山内紀嗣、浜河泉古代寺院研究会、帝塚山大学歴史考古学研究会
- 本書の編集・執筆は、城野・河田が行い分担は目次に記した。
 - 現地調査における写真撮影は、各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は河田が行った。
 - 現地調査及び本書には、国上座標VI系に基づく座標数値及び座標北を使用した。
 - 調査及び本書のレベル高は、T.P.を使用した。
 - 調査における出土遺物及び図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを望む。

凡

1. 瓦窯の呼称は、海会寺に関連する既知の瓦窯に通し番号を付したものである。海会寺跡講堂下層で確認されている登窯を「瓦窯1」、昭和30年大阪府教育委員会調査の平窯を「瓦窯2」とし、今回報告する3基の瓦窯に年代の古いものから順に数字を付したものである。よって、本書における瓦窯の呼称は、調査時及び大阪府教育委員会発行「大阪府文化財分布図」(2001)と異なる。

本書、調査時、「大阪府文化財分布図」記載との瓦窯呼称の対応関係は次の通りである。

例

調査時	「分布図」	本書
カマ0	1号窯	瓦窯3
カマ1	2号窯	瓦窯4
カマ2	3号窯	瓦窯5

- 図中、断面を瓦塊類トーン、須恵器・黒塗り、土師器その他 - 白抜きのように塗り分けた。
- 遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5ℓのものである。

本文目次

第1章 海会寺跡の概要	4	第7節 鳥尾	18		
第1節 調査の概要	(河田)	4	第3章 造構	19	
第2節 海会寺跡の概要	(城野)	4	第1節 各瓦窯の概要	(河田)	19
第2章 瓦塊類の分類	(河田)	9	第2節 瓦窯3	(河田)	19
第1節 軒丸瓦		9	第3節 瓦窯4	(河田)	21
第2節 軒平瓦		9	第4節 瓦窯5	(城野)	28
第3節 丸瓦		9	第4章 まとめ		34
第4節 平瓦		9	第1節 各瓦窯の製品	(河田)	34
第5節 梁斗瓦		18	第2節 各瓦窯・瓦塊類の年代	(河田)	37
第6節 埼		18	第3節 既往の調査成果との関連	(城野)	38

挿図目次

第1図 遺跡の位置.....	4	第13図 鳥尾	17
第2図 各調査区の位置.....	5	第14図 瓦窯3平・断面図	19
第3図 調査区の区割り.....	5	第15図 瓦窯3・4・5平面図	20
第4図 東A区出土の木柵.....	7	第16図 瓦窯4灰原横断面図.....	21
第5図 ヘラ書き・墨書き土器.....	7	第17図 瓦窯4平・断面図-1.....	22
第6図 軒瓦.....	10	第18図 瓦窯4平・断面図-2.....	23
第7図 丸瓦.....	11	第19図 瓦窯4出土土器.....	25
第8図 平瓦-1	12	第20図 瓦窯5平面図.....	26
第9図 平瓦-2	13	第21図 瓦窯5断面図.....	27
第10図 平瓦-3	14	第22図 瓦窯5縁壁部材.....	29
第11図 平瓦-4	15	第23図 瓦窯5出土土器.....	31
第12図 瓦斗瓦・埠.....	16	第24図 S D01出土遺物	33

写真目次

写真1 調査区垂直写真.....	39
------------------	----

表目次

第1表 各調査区の概要.....	5	第4表 瓦窯4出土遺物	24
第2表 出土遺物.....	18	第5表 瓦窯5出土	30
第3表 瓦窯3出土遺物	19	第6表 平瓦各型式の出土比率.....	36

図版目次

P L. 1 調査区全景	P L. 11 瓦窯5-3
P L. 2 西・中央区全景	P L. 12 瓦窯5-4
P L. 3 東A B C区全景	P L. 13 瓦窯5-5
P L. 4 瓦窯全景	P L. 14 S D01
P L. 5 瓦窯3	P L. 15 遺物-1
P L. 6 瓦窯4-1	P L. 16 遺物-2
P L. 7 瓦窯4-2	P L. 17 遺物-3
P L. 8 瓦窯4-3	P L. 18 遺物-4
P L. 9 瓦窯5-1	P L. 19 遺物-5
P L. 10 瓦窯5-2	P L. 20 遺物-6

第1章 海会寺跡の概要

第1節 調査の概要(第1・2・4・5図、P.L.1~3-15)

調査区の設定及びその呼称は、第3図の通り。調査期間は平成6年12月8日から平成7年7月22日まで、各調査区の調査期間は次の通り。

- ・中央区 平成6年12月から平成7年6月。
- ・西区 平成7年1月から同年6月。
- ・東A・C区 平成7年1月から同年3月。
- ・東B区 平成7年2月から同年7月。

本書で報告するのは、東B区のうち瓦窯3基を検出した一部のみで、その他の調査区における調査成果の概略を以下に記す。

中央A区では南へ落ちこむ谷、同B区では土坑を検出した。西A区では不定形の土坑と溝、同B区では土坑、ピットを検出した。このうち西B区で検出した土坑は、凸面に丸タキ、凹・凸面にハナレ砂の痕跡がみられる平瓦が出土していることから12世紀代のものと考えられる。

東A区では、埋積谷を検出し、埋積谷から8世紀代の七器とともに、木樋(第4図1)や「寺」と書かれた墨書き土器(第5図2)が出土した。木樋は、谷を堰き止めた堤に設置された状態であった。材を削りぬいて作られており、板状の蓋がつく。長さ約2.7m。堤で堰き止められた側の埋積谷からは、加工痕のある木片が幾

つか出土している。同B区では、斜面において今回報告する瓦窯を検出した。東B区の平坦地及び東C区では、造構は確認されなかった。なお、表で「寺」とヘラで刻まれた須恵器(第5図3)が採集されている。

西B区の土坑の一部が12世紀代のものであるが、その他、西・中央区で確認した造構及び包含層出土の遺物は、大半が7~8世紀代の丸・平瓦で、一部に被熱し赤変したものもみられる。被熱が火災によるものとすれば、赤変した瓦類は、海会寺焼失後、つまり9世紀代以降に二次移動したものと考えられる。ただ、該当する年代の遺物が共存していない。

今回の調査区は、伽藍南側に接し、中央区は南側築地塀の延長線上である。にもかかわらず、飛鳥・奈良時代の造構は谷及び瓦窯だけであった。

第2節 海会寺跡の概略(第2図、第1表、写真1)

海会寺跡では現在までに史跡指定申請及び整備事業に伴う調査をはじめとして、数多くの調査が行なわれ、それぞれにみるべき成果が得られている。詳細は各報告書等に詳しいが、それらの成果をまとめると以下のようになる。(以下、特に記載のないものは「海会寺・海会寺遺跡発掘調査報告書」に据る)

1. 寺院

・東に金堂、西に塔が建ち並び、その北方に講堂を配する、いわゆる「法隆寺式伽藍配置」を採用する。

・各堂塔の規模は以下のとおり。

金堂基壇は東西21m、南北は不明。

塔基壇は一辺13.2m、基壇高1.7~1.8m。柱間は2.4m等間。

講堂は基壇規模は不明ながらも、礎石抜取穴の確認により桁行7間、梁間4間、柱間は2.4m等間と推測される。

回廊は桁行2.1m、梁間2.4mの単廊。

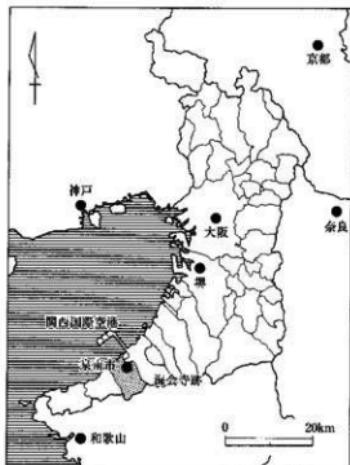
南門基壇は東西12.6m、南北9.0m。桁行3間、梁間2間、柱間は脇の間3.0m、中の間3.6m、梁間3.0m等間。築地幅3.0m。

・確認された基壇化粧は乱石積みのみ。

・金堂、塔と講堂、南門では建物主軸が異なり、後者は西に6度振る。

・軒丸瓦の年代観より創建時期は7世紀第3四半期である。

・金堂所用の単弁八葉蓮華文軒丸瓦(I型式)は大和吉備池廃寺、押津四天王寺所用軒丸瓦と同様。製作技法や改変の確認により吉備池廃寺から四天王寺、海会寺へと瓦筋が移動した



第1図 遺跡の位置

第1表 各調査区の概要

年代	調査区	調査主体	調査原因	主な成果	註
昭和4年	—	府史委西山勝次郎	—		④
昭和6年	—	石田茂作	—		⑤
昭和7年	—	府史委池田谷久吉	—	礎石1個を確認	⑥
昭和7年	—	石田茂作・池田谷久吉	—	礎石1個を確認	⑤
昭和8年	—	池田谷久吉	—	礎石13個を確認	⑥
昭和30年	—	府教委	宅地造成	寺院西南側の丘陵部において時期不明の平窓を確認	⑦
昭和49年	—	南川孝司ら	—	基礎の確認、大量の埴が出土	⑧
昭和50年	—	府教委	国史跡指定申請資料作成	塔基壇の一部を確認	⑨
昭和56年	—	府教委	ゲートボール場建設	大規模な掘立柱建物跡群を確認	⑩
昭和58年	東地区	市教委	防火水槽設置	寺院西側斜面地において土坑を確認	⑪
昭和59年	中央地区	市教委	史跡指定申請	築落部分の調査	⑫
昭和60年	中央地区	市教委	史跡指定申請	金堂、塔周辺の調査	⑬
昭和61年	南地区	市教委	史跡指定申請	講堂、回廊、塗地層、南門周辺の調査	⑭
平成元年	89-1	市教委	個人住宅建設	寺域西南側において中世のピットや土坑を確認	⑮
平成元年	89-2	市教委	マンション建設	寺院西側斜面地において多くの粘土探掘土坑を確認	⑯
平成2年	立会	市教委	ガス管埋設	通構、遺物は確認されず	⑰
平成2年	立会	市教委	水道管埋設	中世以後に複数移動を受けた白鳳期の瓦群、及び中世通構・遺物包含層を確認	⑱
平成3年	—	市教委	整備事業	西面回廊下の整地層の調査	—
平成5年	—	市教委	整備事業	豪族の居館とされるVI期の全貌が明らかになる	⑲
平成6年	中央区 東区	市教委	埋蔵文化財センター建設	寺域南側において木造の設置された埋積谷を確認	本書
平成7年	西区 東B区	市教委	埋蔵文化財センター建設	隣接する3基の瓦室を確認	本書
平成7年	95-1	市教委	遊技場建設	通構、遺物は確認されず	⑳
平成7年	95-2	市教委	水道管敷設	周辺の微地形を確認	㉑
平成8年	試掘	市教委	神社本殿及び社務所建設	神社境内にトレチ6箇所	—
平成8年	96-1	市教委	個人住宅建設	寺域南側において谷地形の確認	㉒
平成9年	97050	府教委	府道沿い山貝織縫歩道設置	通路の南西端部での調査	㉓
平成10年	97-1	市教委	神社本殿建設	金堂基壇南北半が中世期に大きく削平されていることが判明	—
平成10年	98-1	市教委	神社社務所整備	中世～近世の壁面を確認	—
平成10年	立会	市教委	倉庫建設	通構、遺物は確認されず	㉔
平成13年	01-1	市教委	個人住宅建設	谷地形及び中世の整地層を確認	㉕
平成13年	01-2	市教委	個人住宅建設	谷地形及び中世の整地層を確認	㉖
平成14年	02-1	市教委	個人住宅建設	通構、遺物は確認されず	㉗

府史委：大阪府史跡名録天然記念物調査委員会 府教委：大阪府教育委員会 市教委：泉南市教育委員会



第2図 各調査区の位置



第3図 調査区の割り

ことが確認されている。吉備池廃寺は舒明天皇11(639)年に創建された百濟大寺と比定されており、そこでは同文異范(T A、I B型式)の2種の軒丸瓦が使用されていた。この2種の瓦はそのまま四天王寺(楠葉平野山瓦窯)へと移動し(NM II a 1、NM II a 2型式)、海会寺には1范(吉備池廃寺 I B、四天王寺 NM II a 2型式)のみがもたらされたことが判明。

・金堂以外の堂塔に葺かれた軒丸瓦は素文様の單弁八葉蓮華文軒丸瓦(T B型式=山田寺式垂式)と複弁八葉蓮華文軒丸瓦(II A・II B型式=川原寺式)の2種3型式のみである。

・相輪露盤は凝灰岩と青銅板が組み合う特殊な構造を持つ。凝灰岩は奈良県二上山屯鶴峯産。海会寺において凝灰岩製品は露盤のみである。

・塔所用と思しき方形三尊塔は大和橘寺や同川原寺と同系に達なるものであるが、踏み返し技法により先の二寺の塔仏よりも一回り小さい。

・主要伽藍の建つ丘陵の北西約3分の1は整地による盛土。矩形状に大規模な整地が行なわれていた。層厚は西面回廊下で2mに及ぶ。

・南門基壇下層に地鎮造構を確認。焼けひずんだII A型式軒丸瓦や費斗瓦、埴、河原石などを埋納。

・南門に取り付く築地によって寺域の南限を画す。

・大溝によって寺域東限を画す。

・寺域南端及び西端は谷地形に制約されていた。

・寺域は南北1町半、東西1町と考えられる。

・9世紀前半の被災によって寺院は焼失。

・9世紀後半、塔基壇北側に掘立柱建物が建てられる。

・12世紀後半、金堂基壇周辺に再興寺院が建立される。

・13~14世紀代、古代南面回廊の礎石や南門基壇を利用し、堂舎が建てられる。

・13~14世紀代、講堂基壇上や西面回廊西側に掘立柱建物。

・14世紀後半、金堂及び塔基壇の南半が削平される。

・16世紀頃、再興寺院の消滅。

2. 集落

・7世紀初頭に寺院東側平坦地に掘立柱建物群が出現する。以後、9世紀前葉に消滅するまで全11期の掘立柱建物群が展開する。

・8世紀初頭(VI期)と同中葉(VII期)の2時期にわたって企画性の高い配置を探る建物群が現れる。ともに大規模な掘立柱

建物 S B201(VI期、床面積96.6m²)、S B210(VII期、床面積104.88m²)を主殿とし、複数の脇殿を構える。

・9世紀前葉、寺院の焼亡と前後して集落も廃絶する。

・10世紀後半から11世紀前半に東側平坦地に複数の掘立柱建物群が建てられる。

3. 生産遺構

・講堂基壇下層より創建期の瓦窯群(瓦窯1)と鍛冶炉2基を確認。

・寺域西側の谷部において7世紀代の粘土採掘穴を確認。

・寺域西側、谷から西側へ続く丘陵斜面には平窯(瓦窯2)が存在した。

現在までの調査によって以上のような成果が得られているわけだが、これらのうち生産遺構についていま少し詳しく触れてみたい。

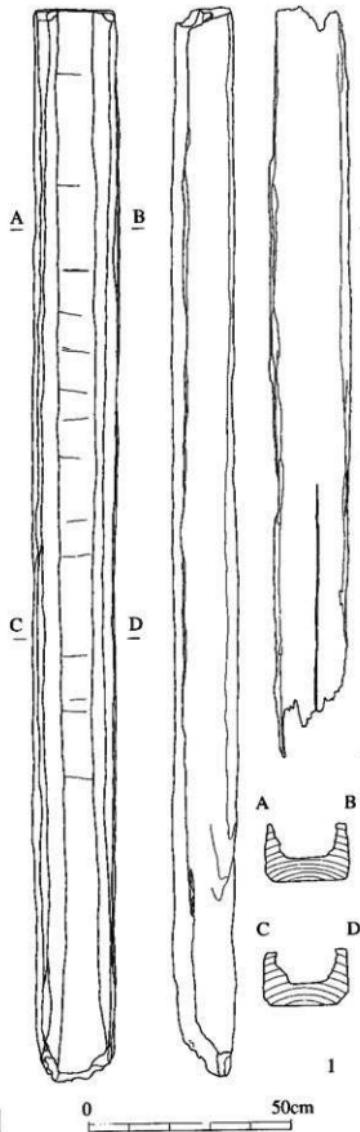
瓦窯1

講堂基壇北側の斜面において、講堂基壇下層より続く瓦や炭を多く含む焼土層が確認され、それら焼土層の下層から登窯の焼成部と考えられる瓦の堆積が検出された。その規模は東西1.5m以上1.8m以下、南北0.9m以上を測り、その床面の平均斜度は17°である。窯の天井部および御壁は、講堂基壇構築時に削平されており、焼成部床面の一部のみが確認された。床面には丸・平瓦の凸面を上に向け、長軸を窯の主軸方向に対しほぼ直交する方向にそろえた2列の瓦列が確認される。瓦列は地山直上に2~3段の瓦を積み重ねており、焼成部から燃焼部へ続く「階」の役割を果たしていたものと思われる。地山の傾斜から全長4m前後の登窯が想定される。

瓦窯からはI型式の平瓦が出土した。また瓦窯1の存在する斜面の東方にはさらに焼土層が数ヶ所確認されることから、複数の瓦窯が営まれていた可能性が強い。

鍛冶炉

鍛冶炉は、瓦窯が検出された講堂北側斜面の上部に位置しており、堅く焼き締まった焼上面として検出された。その平面規模は南北3.0m、東西1.8mを測り、特にその南半部では、直径1.8mにわたって約5cmの厚さに還元されていた。この還元焼土面は講堂礎石を据付け穴に切られており、礎石抜き取り跡に見られる断面から、その下層には赤橙色の焼土層が続いている状況が観察される。鍛冶炉の下層には瓦窯に伴うと思われる平瓦片が多数みられることから、瓦窯に比べ鍛冶炉は



第4図 東A区出土の木樁

やや後出するものと考えられる。

この鍛冶炉から東に20mはなれた位置にも同様な還元焼土面が認められる。その規模は東西40cm、南北20cmという小規模なものであるが、還元されて堅く焼き締まった焼土面の状況は先の鍛冶炉とほぼ同様のものであり、2基以上の鍛冶炉の存在を推定できる。

このように、主要伽藍の立地する丘陵斜面において、それぞれ複数の瓦窯及び鍛冶炉が確認されている。

瓦窯2

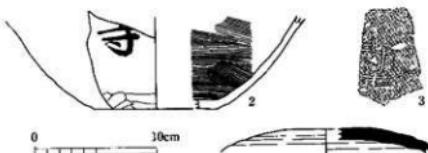
現在は住宅地となっている寺域西側の丘陵「福荷山」にもかって瓦窯が存在し、土砂採掘に際し大阪府教育委員会によって調査が行なわれている。⁹担当された藤澤一大先生のご教授によると、瓦窯は平窯であり、遺物は出土しなかったとのことである。窯の形態が平窯であることから補修瓦を焼いていたものと考えられよう。

粘土採掘土坑

福荷山の東麓、つまり寺域西端に接する地点において、10数基の粘土採掘土坑が確認されている。土坑はお互いに切り合うことのないよう意識的に配置されていた。土坑集中地点にのみ灰白色粘土層が分布することから、土坑はこれらを採掘するためのものと判断される。これらの土坑の埋土は一様であり、粘土採掘後一気に埋戻して整地された様子が伺える。さらに整地後に8世紀前半の遺構が築かれていることから、採掘がそれ以前に遡ることは間違いない、海会寺創建期の瓦窯類に用いた粘土を採掘した可能性が強い。

以上、海会寺跡における既知の生産遺構の概略である。講堂下層の鍛冶炉を別にすれば、瓦窯もしくは粘土採掘土坑といった瓦窯類の生産に關係するものに限られる点が注目されよう。

最後に、海会寺跡に関する研究成果としては以下の文献が挙げられる。



第5図 ヘ書き・墨書き土器

- 木野正好「京阪・海会寺・一間神社」「海会寺」「泉南市教育委員会」(1987)
- 石原正志「古代和泉と奈良」「奈良寺」「泉南市教育委員会」(1987)
- 小笠原灯春「海会寺建立式典とムツ」「海会寺」「泉南市教育委員会」(1987)
- 森 郡夫「海会寺の古代瓦足と中央紋章」「海会寺」「泉南市教育委員会」(1987)
- 堀田勝一「朝鮮三国時代の官能配墨と海会寺」「海会寺」「泉南市教育委員会」(1987)
- 柳川昭平「海会寺跡の現代の構造について」「海会寺」「泉南市教育委員会」(1987)
- 泉南市・泉南市教育委員会「見る海会寺」(1988)
- 斐田哲郎「上器の変化と瓦の出現、『古代の技術革新』第7回歴史の華ひく泉南シンポジウム資料」泉南市・泉南市教育委員会(1994)
- 森 郡夫「海会寺式古墳配石の成立」「海會寺」(大阪府立大学教養学部紀要)第63編(1995)
- 上原真人「寺院の変遷からみた仏教」「仏教の受容と古代同窓」第8回歴史の華ひく泉南シンポジウム資料、泉南市・泉南市教育委員会(1995)
- 近藤廣司「和泉における古代寺院の成立と滅没」「攝河原古代寺院論叢」第1集 摂河原古代寺院研究会・近藤廣司(1997)
- 山本芳三「攝河原古代寺院の基礎化粧」「攝河原古代寺院論叢」第1集 摂河原古代寺院研究会・摂河原文庫(1997)
- 森 郡夫「墓内制の成立と寺院造営・海会寺を手がかりとして~」「摂河原の古代寺院とその源流」第1回摂河原古代寺院フォーラム資料 泉南市教育委員会・攝河原古代寺院研究会・摂河原文庫(1997)
- 大庭 廉「古代寺院と寺辯の実践を復元する~その研究史と問題の所在~」「摂河原の古代寺院とその源流」第1回摂河原古代寺院論叢フォーラム資料 泉南市教育委員会・摂河原古代寺院研究会・摂河原文庫(1997)
- 上原真人「古代寺院と寺辯の実践~その古代寺院とその源流~」第1回摂河原古代寺院フォーラム資料 泉南市教育委員会・摂河原古代寺院研究会・摂河原文庫(1997)
- 近藤廣司「古代寺院と寺辯(和泉)」「摂河原の古代寺院とその源流」第1回摂河原古代寺院研究会・摂河原古代寺院研究会・摂河原文庫(1997)
- 広瀬和雄「古代寺院成立の歴史的背景~畿内及びその周辺を中心として~」「古代寺院の出現とその背景」第42回西紀文化財研究集会 香芝市二上山博物館・西紀文化財研究会(1997)
- 近藤廣司「海会寺跡」「古代寺院の出現とその背景」第42回西紀文化財研究集会 香芝市二上山博物館・西紀文化財研究会(1997)
- 伏見一郎「和泉古代寺院と寺辯」「大阪府下遺跡文化財研究会(第36回)」資料 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター(1997)
- 大阪府立歴史文化博物館・(財)大阪府文化財調査研究センター「発掘調査報大坂'97」(1997)
- 泉南市教育委員会・大阪府立歴史文化博物館「重要文化財指定記念「那須 漱眞海会寺」(1997)
- 森 郡夫「海会寺建立の意義」「第1話 海会寺跡」「第1回古代史博物館フォーラム資料泉南市・泉南市教育委員会(1998)
- 柴原永通男「記された古代の和泉」「第1話 海会寺跡」「第1回古代史博物館フォーラム資料 泉南市・泉南市教育委員会(1998)
- 花谷 法「古事記の瓦~百濟大寺と海会寺~」「第1話 海会寺跡」「第1回古代史博物館フォーラム資料 泉南市・泉南市教育委員会(1998)
- 小笠原灯春「「奈良新瓦からみた和泉海会寺の古事記」『奈良大学教育学部紀要』人文科学・社会科学』第68号(1998)
- 大庭 廉「『難波』日本の美術館329」「王文堂(1999)
- 斎真弘立履原考古学研究所附属博物館「斎真弘」(1999)
- 上原真人「飛鳥時代の型~軒丸~」「第4話 軒からひもと更級像~弥生・古墳・飛鳥~」「第4回古代史博物館フォーラム資料 泉南市・泉南市教育委員会(2000)
- 伏見一郎「海会寺の百濟大寺式瓦丸瓦」「古代瓦研究!」奈良国立文化財研究所(2000)
- 鈴 伸也「畿内における古事記の標識」「古代」第110号 早稲田大学考古学系(2001)
- 城野博文「泉南市・海会寺跡」「中世寺院の基開け」「第4回摂河原古代寺院論叢(2001)
- 資料 摂河原古代寺院研究会・大阪府立歴史文化博物館(2001)
- 歴史いずみさの「古墳から寺院へ~古代和泉と伽藍形成~」(2002)

第2章 瓦類の分類

3基の瓦窯及びS D01から出土した遺物は、コンテナにして667箱にのぼる。今回検出した瓦窯は、海会寺との関連性を考慮する必要がある。よって、本書における瓦窯類の分類は、「^①海会寺」で行われているもの(以下「海会寺分類」と表記)に準拠した。

なお、出土した瓦窯類のうち、軒瓦および平瓦の一部に海会寺分類では把握しきれないものがあった。軒瓦は、型式名の再設定を行なう必要が生じることからここではあえて型式設定を行っていない。平瓦は、型式の差異により造形及び遺物の新旧関係が把握できるため新型式を設定した。

第1節 軒丸瓦(第6図、P L.15)

軒丸瓦は合計4点出土した。3型式に細分できる。海会寺所用のI B・II A型式と、海会寺分類に当てはまらないものである。

4・5は海会寺所用のもの。4がI B型式、5がII A型式にある。いずれも瓦窯5で出土している。燃焼室の側壁及び燃焼室天井で構造物として利用されていたもの。

6・7は遺跡内ではじめて確認されたもの。瓦窯5の燃焼室埋土から出土した。中房は欠損しており不明。内区は複弁で間弁がみられる。外区内縁には珠文がめぐり、外縁は直立し上面に幅約1cmの平坦面を持つ。瓦当面との接合方法は不明。瓦当直径は復元すると約14cm。いずれも焼成は不良。胎土は精良で灰白色を呈し、1mm以下の黒色粒を極少量含む。2点出土しているが、焼成および胎土が似ていることから同一個体とも考えられる。

第2節 軒平瓦(第6図、P L.15)

軒平瓦は同一型式のものが2点出土した。瓦窯4の灰原3層から出土した。海会寺伽藍内部の調査では、確認されていない型式である。瓦窯4の灰原で出土したことと、後述するが平瓦部が瓦窯4で焼成された平瓦II C型式であることから、瓦窯4で焼成されたと想定できる。

8は出土した2点のうち、遺存状況のよいものである。内区には唐草文、外区には圓線がめぐる。曲輪額。瓦当と平瓦の接合は、平瓦部広端凹凸面とともに粘土を貼って瓦当裏面と接合している。接合面の刻みの有無は不明。平瓦部は平瓦II C型式。焼成は不良だが、ごく一部に遺元色を呈する部分がみられる。

胎土は精良で酸化色を呈する箇所では灰白色を呈し、1mm以

下の黒色粒を極少量含む。2点出土しているが、焼成および胎土が似ていることから、同一個体と考えられる。平城宮式軒平瓦6663型式の範疇で捉えるならば、本型式とその平瓦部となる平瓦II C型式は、8世紀後半期以降の年代が想定できる。^②

第3節 丸瓦

型式を判別できた個体のうちの大半が行基式で、玉縁式は瓦窯4の焼成部床面や瓦窯5焼成床面から若干出土したのみである。

I型式(第7図9~12、P L.16)

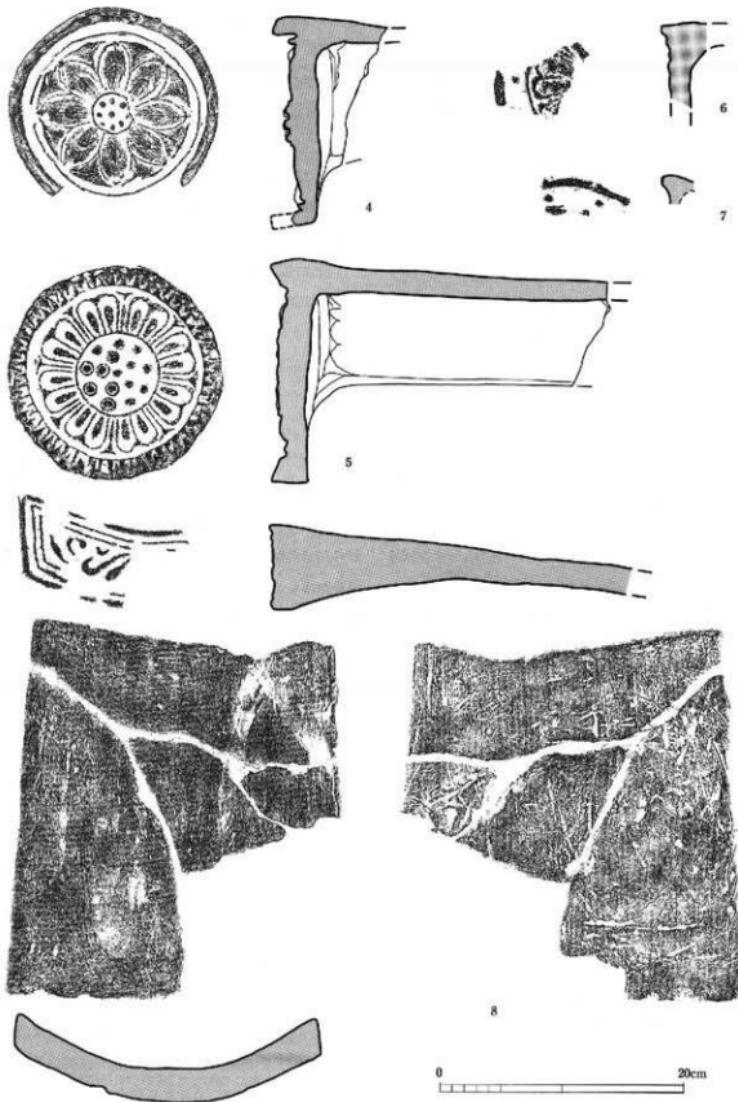
行基式、細かくみると成形・調整やその痕跡の有無により、4つに細分できる。A-凸面は丁寧なナデを施し、凹面に分割突帯の痕跡が右側に残るもの(9)、B-Aとは逆に分割突帯の痕跡が左側に残るもの(10)、C-D分割突帯の痕跡が残らないもの(11)、D-凸面に側縁に平行したタキが残るもの(12)である。なお、A-CとDとに新旧関係がみられる。Dは、層位的に最も新しい瓦窯5の前庭部埋土とSD01埋土からしか出土していないためである。ただ、今回の調査では、上記の区分が各瓦窯で焼成された製品の単位であるかどうか判断できる資料が得られなかつたため、細分は行わず、新旧関係の存在を指摘するにとどめる。総じて酸化色を呈する個体が多い。灰白色を呈し、胎土は精良。1mm以下の黒色粒、クサリ糠を少量含む。

II型式(第7図13、P L.16)

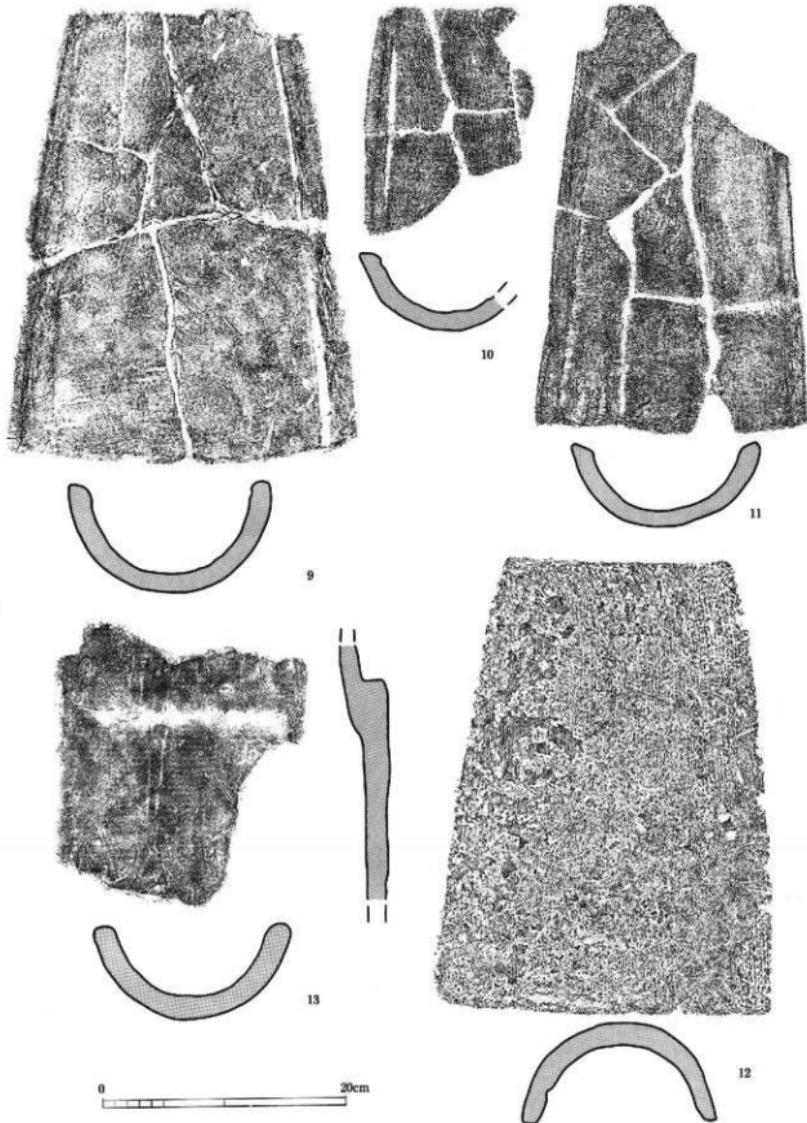
玉縁式。凸面はナデで仕上げ、凹面玉縁部に布目が残る(13)。遺元色のものは出土していない。灰白色を呈し、胎土は精良。1mm以下の黒色粒、クサリ糠を少量含む。

第4節 平瓦

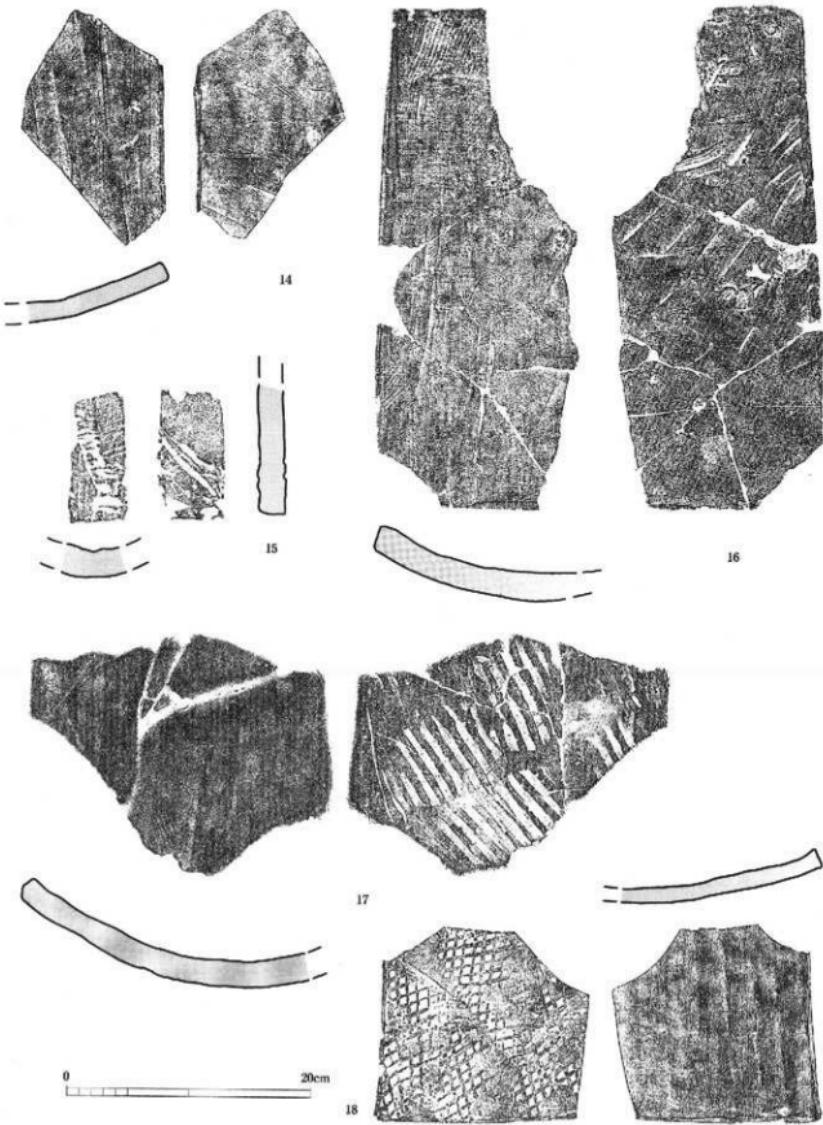
7つの型式が出土した。このうち、2つは海会寺分類では把握できない新型式である。III型式は一枚作り、その他は粘土板桶巻作りと考えられる。というのも、III型式以外いずれの型式においても桶巻作りの痕跡が確認され、かつ粘土板の痕跡がみられる個体はあるものの粘土板の痕跡をとどめる個体は皆無であったためである。II型式は海会寺分類ではI型式のみであったが、凸面に残るタキ板の痕跡の差異から3つに細分した。なお、海会寺分類におけるII型式は本書におけるII C型式に該当する。



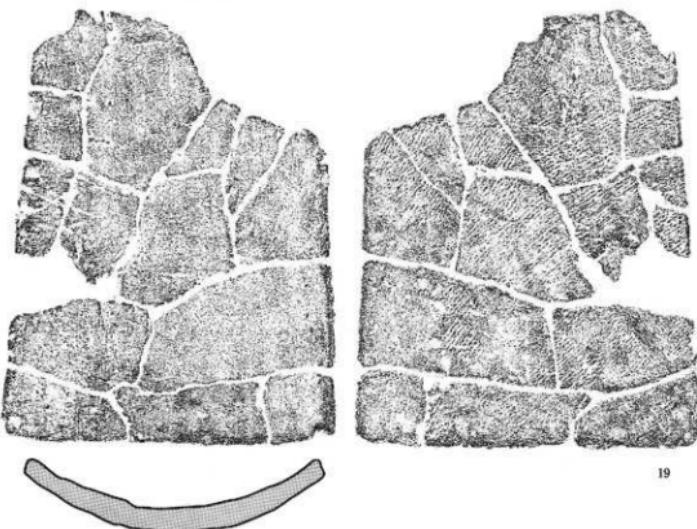
第6図 軒瓦



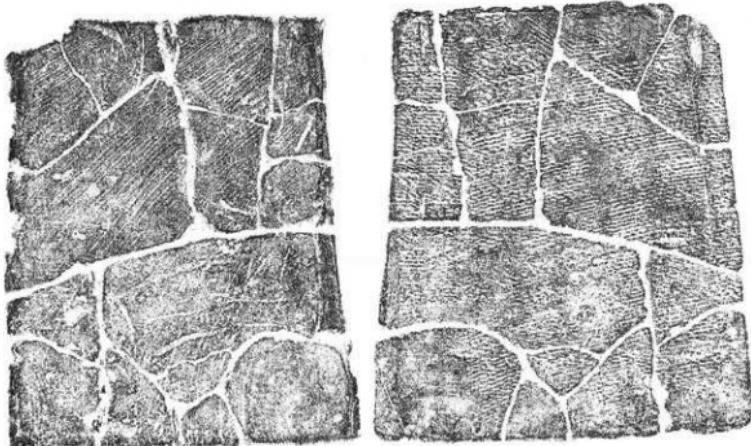
第7図 九瓦



第8図 平瓦-1

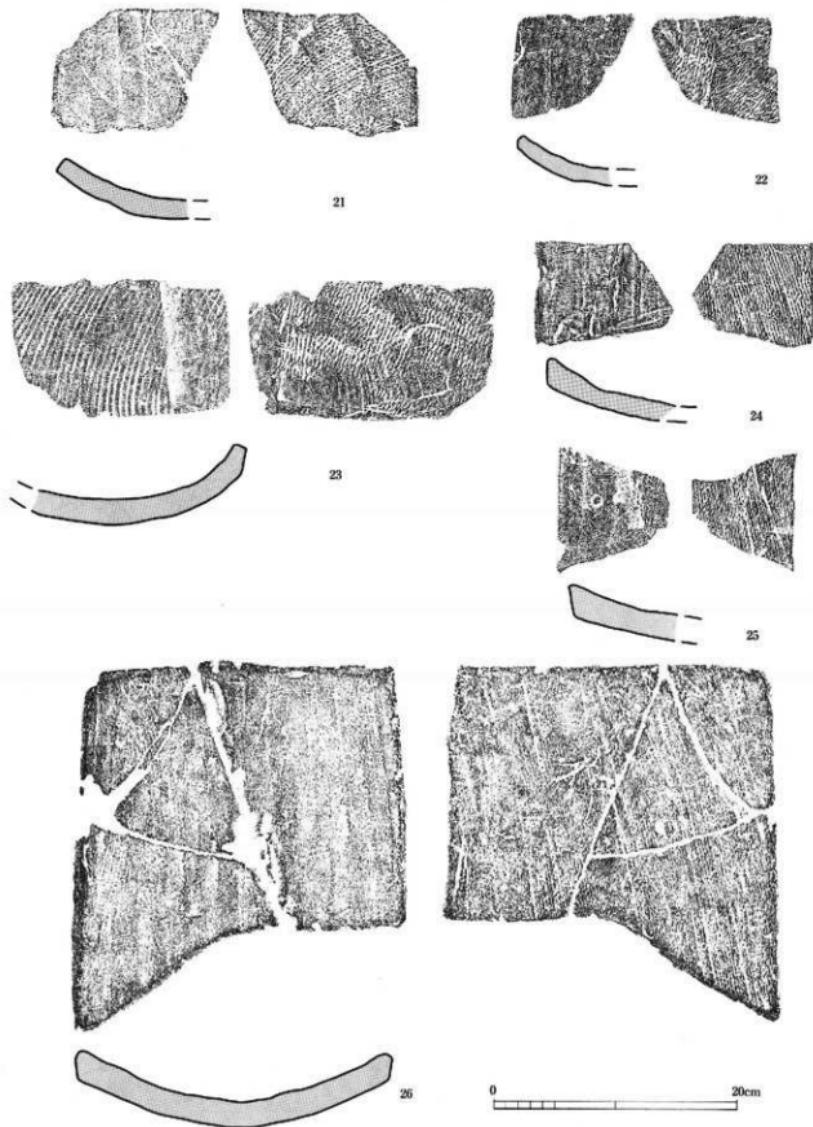


19

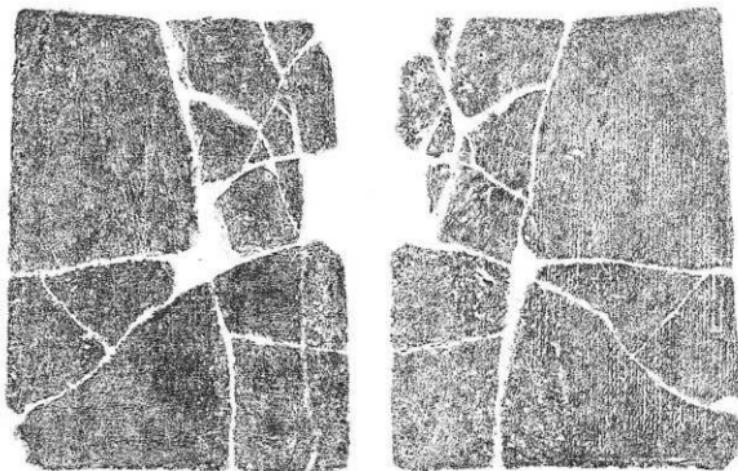


20

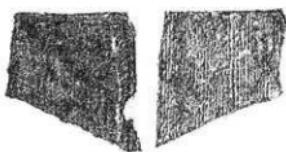
第9図 平瓦-2



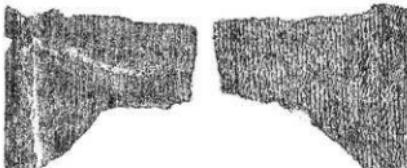
第10図 平瓦-3



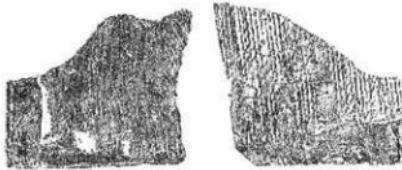
27



28



29

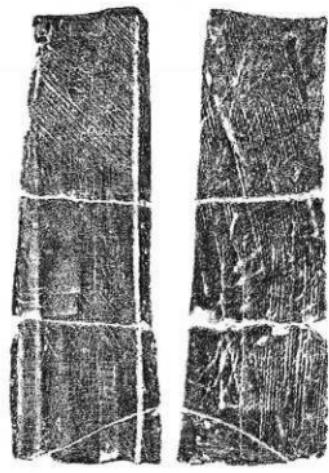


30

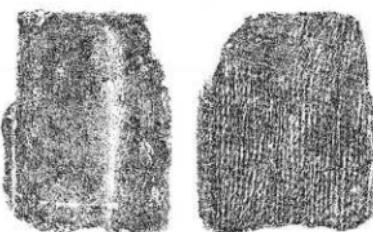


0 20cm

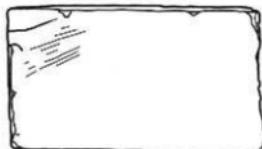
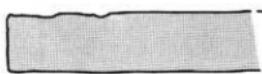
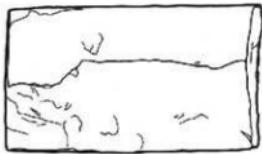
第11図 平瓦-4



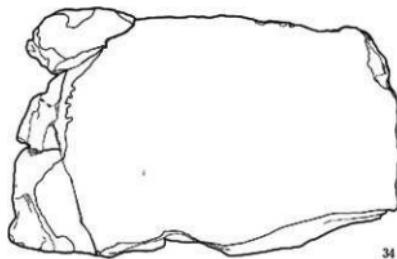
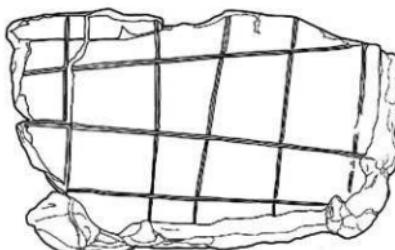
31



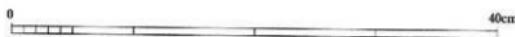
32



33



34



第12図 鋸斗瓦・埴

I A b 型式(第8図14~16、P L. 17)

凸面は丁寧なナデが施され、タタキ痕は不明。また、斜方向の板状工具の痕跡が一部みられる(14-16)。凹面は、縦方向のナデにより布目をナデ消す。凹面のナデには、凹面の全面に縦方向の丁寧なナデを施すもの(14)と、一部に施すもの(16)がある。それぞれ厚さが異なり、前者は1.6cm程度、後者は2cm程度である。凹面に布の縫じあわせ(15)や、糸切り痕(16)が観察できることから、粘土板桶巻作りと考えられる。布目は3cm四方で縦横とも25~28本程度。側縁端は凹凸面とも面取りを施す。還元色を呈する個体がほとんどで、胎土は精良、2mm以下の白色粒および1mm以下の黒色粒を少量含む。

I B 型式(第8図18、P L. 17)

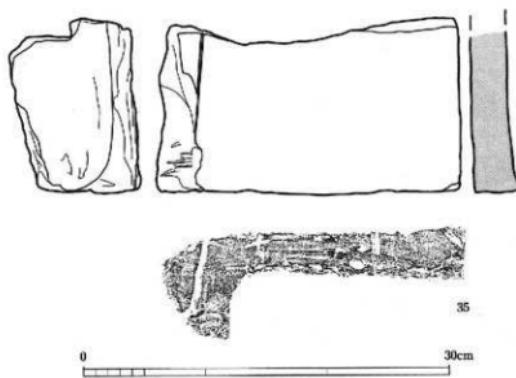
凸面は斜格子タタキで、一部ナデ消されている。凹面には布目が残り、調整は施していない。布目は、3cm四方あたり縦横とも23~26本程度。側縁端及び端縁には凹凸両面に面取りを施す。凹面に模骨痕(18)が観察できることから、桶巻作りと考えられる。還元色を呈し、胎土は精良。1mm以下の黒色粒を極少含む。

I F 型式(第8図17、P L. 17)

凸面は平行タタキで、一部ナデ消されている。凹面には布目が残り、調整は施していない。布目は3cm四方あたり縦横とも20本程度。側縁端の凹凸両面に面取りを施す。凹面に模骨痕(17)が観察できることから桶巻作りと考えられる。還元色を呈するものが多く、胎土は精良。1mm以下の黒色粒を極少量含む。

II A 型式(第9図19~21、P L. 18~19)

凸面には縄タタキが残る。縄目は右上がりで、10条/5cm。縄タタキは「叩きしめの円弧」を呈す(19)。凹面には布目が残り、ナデなどの調整は施していない。布目は3cm四方あたり縦が20本、横が25本程度。広底端縁および側縁端の凹凸両面側ともに面取りを施す。凹面に模骨痕(21)が観察できることから、桶巻作りと考えられる。ごく一部に還元色を呈する個体がみられるが、大半が酸化色を呈し、胎土は精良。酸化色を呈する個体は黄灰色を呈し、1mm以下の白・黒色粒のほかクサリ礫を少量含



第13図 鷲尾

む。

II B 型式(第9図20、第10図22~23、P L. 18~19)

凸面は縄タタキが残る。II A型式のような典型的な「叩きしめの円弧」を呈するのではなく、タタキ板原体の長辺が側縁にはほぼ平行した箇所がみられる(P L. 18)。縄目は右上がりで、7条/5cm。一部に布目のみられるものもある(22)。本型式の特徴として凹面に糸切り痕が明瞭に残る(20)点があげられる。布目はわずかに観察できる程度で、3cm四方あたり、縦が33本、横が28本程度。凹面にわずかにではあるが模骨痕(23)や、糸切り痕(20~22~23)が観察できることから粘土板桶巻作りと考えられる。側縁端の凹凸両面に面取りを施すが、凹面の左側を大きく面取りする個体が多い。酸化色を呈する個体が大半を占め、胎土は精良。1mm以下の白・黒粒を少量含み、酸化色を呈する個体ではクサリ礫がみられる。

II C 型式(第10図24~26、P L. 18~19)

凸面には縄タタキが残る。縄目は右上がりで、9条/5cm。縄タタキは、II A型式のような典型的な「叩きしめの円弧」を呈するのではなく、タタキ板原体の長辺が側縁にはほぼ平行した痕跡がみられる。凹面には布目が残り、一部に縦方向のナデを施す。布目は3cm四方あたり、縦が25本、横が26本程度。凹面に粘土板の雜ざき(24)や布の縫じあわせ(25)、模骨痕(26)が観察できることから、粘土板桶巻作りと考えられる。狭端縁および側縁端凹面側に面取りを施す。還元色を呈するものが多く、胎土は精良。2mm以下の黒・白色粒を少量含む。

第2表 出土遺物

	瓦窓3			瓦窓4			瓦窓5			S D 01			合計						
	2次床面 瓦敷き	3次床面 瓦敷き	3次床面 瓦敷き	灰原付近 1層	灰原 1層	灰原 3層	灰原 4層	灰原 5層	灰原蓋下 1層	前庭部埋土	燃焼 及び 焼成度 判定	分 級柱	全 体	上 部	中 層	中 下 層	最 下 層		
土器類	0	0	0.6	0.2	0.25	0.05	0	0	0	0	0.15	0	0	-	-	-	-	1.25	
不明丸	5.9	0.3	23.25	1.85	0	0	13.15	0.7	0	0	0	0	12.6	3.75	4.4	0.6	3.85	57.75	
丸I	9.4	2.05	17.6	0	1.3	0	8.4	0	0.25	0.15	7.6	7.7	1.5	5	0	0	0	56.05	
丸II	0	0	0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.4	
不明平	4.25	0.45	4.15	2.1	3.8	0.95	3.25	0.7	0	1.1	10.35	6.1	0.2	24.5	11.65	4.65	5	3.2	61.95
軒平	0	0	0	0	0	0	6.15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6.15	
平I A b	3.65	1.35	10.45	0.8	1.5	0.4	0	0	0	0	6.05	16.4	0.4	25.9	14.35	9.95	0.4	1.2	66.9
平I B	0.7	0	0	0	1.1	0	0.4	0	0	0	0	0.6	0	1.2	0.9	0	0	0.3	4
平I F	0.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.2	0	0	0	0	0	2.15	
平II A	14.55	1.3	5.1	0.15	0.2	0.65	0.55	0.2	0.1	0	0	0	0	0.5	0.5	0	0	0	23.3
平II B	12.65	1.2	16.5	1.75	1.15	1.35	4.2	0	0.15	0	0	0.3	0	0	0	0	0	0	39.25
平II C	0	0.55	62.1	10	2.6	1.35	40.35	0	0	0	3.8	2.9	2.9	17	5.95	3.3	2.55	5.2	143.6
平II Cか平III	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	29.35	7.1	7.65	5.75	8.85	29.35
平III	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	70.15	4.7	3.6	20.9	10.1	2.8	4.45	3.55	99.4
熨斗瓦	0	0	1.35	0	0.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2.25	
不明埴	0	0	0	0	0	0	0.7	0	0	0	0	0	5.1	1.55	0.7	0.85	0	0	7.35
埴A2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	0.5	0	0	0.5	
埴C	0	0	0	0	0	0	5.65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5.65	
鰐尾	0	0	0	0	0	0	2.25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2.25	
凝灰岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8.05	6.95	0	1	0.1	8.05	
合 計	51.9	7.2	141.5	16.85	12.8	4.75	85.05	1.6	0.5	2.4	98.1	38.9	13.7	147.1	62.45	33.6	19.75	31.25	622.4

単位: kg・50g未満は切り上げ

Ⅲ型式(第11図27~30、P L. 18~19)

いないタイプ。

凸面には継タタキが残る。縄目は右上がりで7条/5cm程度で、側縁に平行に施されている。タタキ痕は端縁まで及ばないものもある(30)。凹面には布目が残り、ナデなどの調整は施されていない。布目は3cm四方あたり、縦が24本、横が20本程度。凹面に布の末端(28・30)や、布の末端を折り返した痕跡(29)が観察できることから、一枚作りと考えられる。なお、本型式の特徴として、凹面の布目末端付近でやや縮み、布目末端より側縁側が段をもち、厚くなっている点があげられる(28~30)。凹面の端縁および側縁は面取りを施す。

第5節 熨斗瓦(第12図31~32、P L. 18~19)

平瓦II C型式をもとにした熨斗瓦が2点出土している。いずれも凸面のタタキ痕の特徴が類似しており、凹面に横骨痕がみられることから平瓦II C型式と判断した。焼成前に分割するもの(31)、焼成前にヘラ状工具による分割裁線を入れ焼成後に分割するもの(32)があり、前者は海会寺分類で示されて

第6節 塙

A 2型式(第12図33、P L. 19)

設置状態にすると、平面長方形で断面が「逆L字状」となる。側面は床面となる粘土板の小口にとりつく。

C型式(第12図34、P L. 19)

平面が「矩形」で、断面が「逆L字状」の「突出部」がないもの。設置状態での「裏面全体」に格子の刻目を持つ。

第7節 鯉尾(第13図35、P L. 15)

鰐尾基底部で、縄帯は欠損している。基底部には布目が残る。窓4の灰原3層から1点出土した。縄帯の位置にはヘラ状工具による刻線と剥離した痕跡がみられる。厚さは鰐尾端で3.5cm、腹部で2.2cm。胎土は灰白色を呈し、2mm以下の白色粒を少量含む。

注釈

①飼田直樹・広川和雄 「遺物」『海会寺』奈良市教育委員会(1987)

②奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所収集資料 II』(1975)

第3章 遺構

第1節 各瓦窯の概要(第15図、第2表、P L. 4)

東B区斜面で検出した遺構は、瓦窯3基とSD01である。瓦窯の呼称は、操業年代の古いものから瓦窯3・4・5とした。後述するが、SD01は瓦窯5の排水溝と判断した。

各瓦窯には層位的に上下関係が認められる。瓦窯3は瓦窯4の灰原直下で検出し、瓦窯4はSD01(瓦窯5の排水溝)に切られている。瓦窯4・5の直接的な層位の上下関係(灰原の層位的な上下関係など)は確認できなかったが、瓦窯5の排水溝であるSD01と瓦窯4に切り合い関係が認められることから、同時に操業していたとは考えにくい。つまり、層位的な関係から各瓦窯とも操業期間の重複は想定できない。

各遺構の出土遺物は、瓦塊類は破片が大半を占める。遺存状況がよくないため各遺構・層位出土の遺物数量は、重量(kg・50g以下は切り上げ)であらわした。第2表は各遺構の主な層位の遺物出土量、第3~5表は層位単位での出土遺物の重量及び比率をまとめている。

各瓦窯における床面の記述は、操業時期の古いものから「1次床面」、「2次床面」、「3次床面」とした。

第2節 瓦窯3(第14~16図、第2・3表、P L. 4~5)

大半が削平されていた。瓦窯4の灰原直下、地山直上で検出したことから、瓦窯3の削平は瓦窯4構築以前に行われたこと

第3表 瓦窯3出土遺物

	重量 (kg)	% (全體)	% (平均)
不明丸	5.9	11.4	—
丸I	9.4	18.1	—
不明平	4.25	8.2	11.5
平Ⅰ A b	3.65	7	10
平Ⅰ B	0.7	1.3	1.9
平Ⅰ F	0.8	1.5	2.2
平Ⅱ A	14.55	28	39.8
平Ⅱ B	12.65	24.4	34.6
合 計	51.9	100	100

がわかる。なお、以下の土層は、瓦窯4灰原横断面(第16図)のものを「①(丸圓み)」、瓦窯3断面図(第14図)のものを「1(丸圓みなし)」で表記している。

1.構造

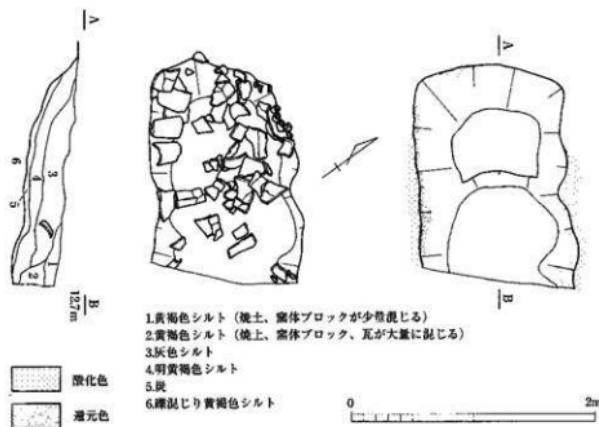
検出長約1.8m、幅約1.3m。遺構の肩付近は還元色、その外縁が酸化色を呈する。遺構底面には約10cmほどの段差がみられ、短軸方向の断面形状は半円形を呈する(第16図)。埋土の最下層には炭層(5・18層)が堆積していた。

遺構の幅、遺構底面の断面形状、遺構肩付近の被熱の痕跡から窯と認定した。さらに長・短軸方向の遺構断面形状、還元色を呈する部分がみられる点、炭層の存在、「階」とも理解できる

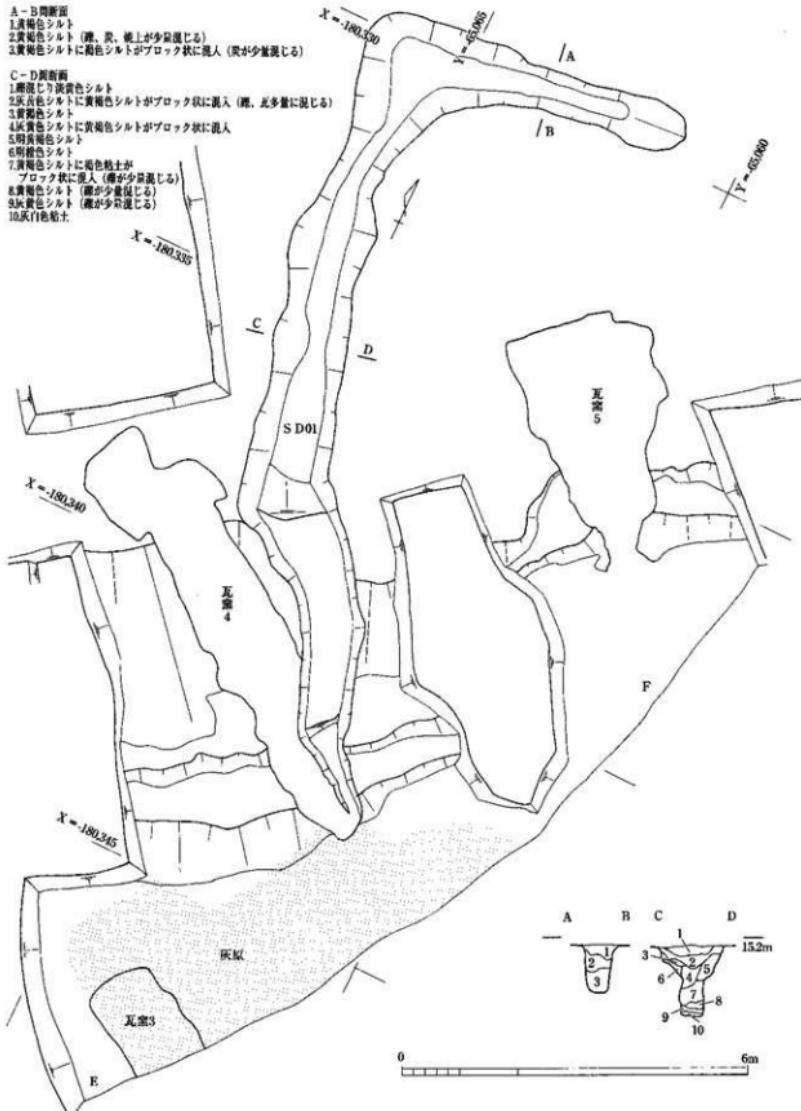
10cm程度の段差がみられる
ことから、瓦窯でしかも登
窯の燃焼部と焼成部の一部
と考えられる。

なお、焼成部の大半は削
平されている。削平された
時期は、瓦窯3の検出面が瓦
窯4の灰原に覆われていた
ことから、瓦窯4の灰原が堆
積する以前、つまり瓦窯4の
操業前であったことがわか
る。

5・18層上面で丸・平瓦が
まとめて出土している
(第14図・P L. 15)。一見並
んだように見えるが、床面



第14図 瓦窯3平・断面図



第15図 瓦窯3・4・5平面図

から浮いていることから、瓦窯が操業していた時期のものではない。つまり、瓦窯3の出土遺物は操業時のものではなく、削平後の埋没過程のものである。なお、5・13層上面で検出した丸・平瓦は検出状況が整然としており、埋土には炭や窓体片などが混在していることから、人為的に埋められた可能性が指摘できる。

2. 遺物

5・13層上面で出土した遺物は、丸・平瓦のみである(第3表)。総重量51.9kg。丸瓦は全体の29.5%で、大半が平瓦であった。型式別にみると、丸瓦はI型式のみで、平瓦はII A型式が39.8%、II B型式が34.6%と平瓦のうちの大半を占める。

第3節 瓦窯4(第15~18図、第2・4表、P L. 3~8・15・20)

天井部と考えられるスサ入り粘土塊が崩落した状態で検出した(P L. 4)。焼成部奥が攪乱により、燃焼部の東半がS D01によりそれぞれ破壊されているが、その他の遺存状況はよい。灰原の一部も確認している。残存部分の検出長は約4.4m。

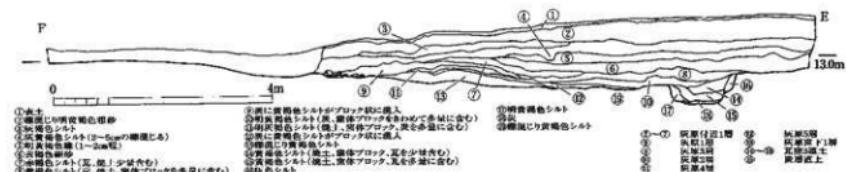
なお、以下の土層についての表記は、瓦窯4灰原横断面図(第16図)のものを「①(丸固み)」、瓦窯4縦断面図(第17図)のものを「I(丸固みなし)」で表記している。

1. 灰原の状況

検出した灰原は、層位的には最終床面である3次床面(14・15層)と2次床面(11層)に対応する層位(11~13・8~12層)にある。いずれも炭や窓体ブロックを含む。それより下層(20~23・13層)は、炭や焼土を含むが、2次床面より下層にあたる。20~23・13層は、1次床面(24層)と対応する可能性が指摘できるが、層位的には関連性が把握できない(第17図)。

灰原検出時の平面プランは、焚口から南東方向にひろがり、最大幅約6.6m、厚さ30cm程度。平面及び断面をみると検出したのはごく一部であり、調査区外にさらにひろがるものと考えられる。

調査時に次のように遺物を取り分けた。



第16図 瓦窯4灰原横断面図

灰原の上層にあたる層位を灰原付近1層(2~10・②~⑦層)とした。崩落した天井との層位的な上下関係は把握できなかったが、少なくとも3次床面の上層にあたることから、瓦窯4廃絶後のものと考えられる。

灰原は1~5層に分層できた。層位的に2・3次床面に対応する。分層した各層位ごとに遺物を取り上げた。

灰原5層直下で地山直上の層位を灰原直下1層(20~22・⑬層)とした。層位的には確認できないが、1次床面に対応すると考えられる。

2. 灰原出土の遺物(第2・4表)

灰原付近1層(2~10・②~⑦層)の出土遺物は総重量12.8kg。約8割が平瓦である。須恵器、丸瓦I型式、平瓦IAb・IB・IIA・IIB・IIC型式、翼斗瓦が出土している。翼斗瓦(第12図32)は平瓦II C型式に分割裁線を入れ焼成後に折りとるものである。

灰原1層(③層)の出土遺物は総重量4.75kg。丸瓦は出土していない。平瓦IAb・IIA・IIB・IIC、須恵器(第19図36)が出土している。平瓦ではII B・II Cが出土量のうちそれぞれ3割弱を占める。

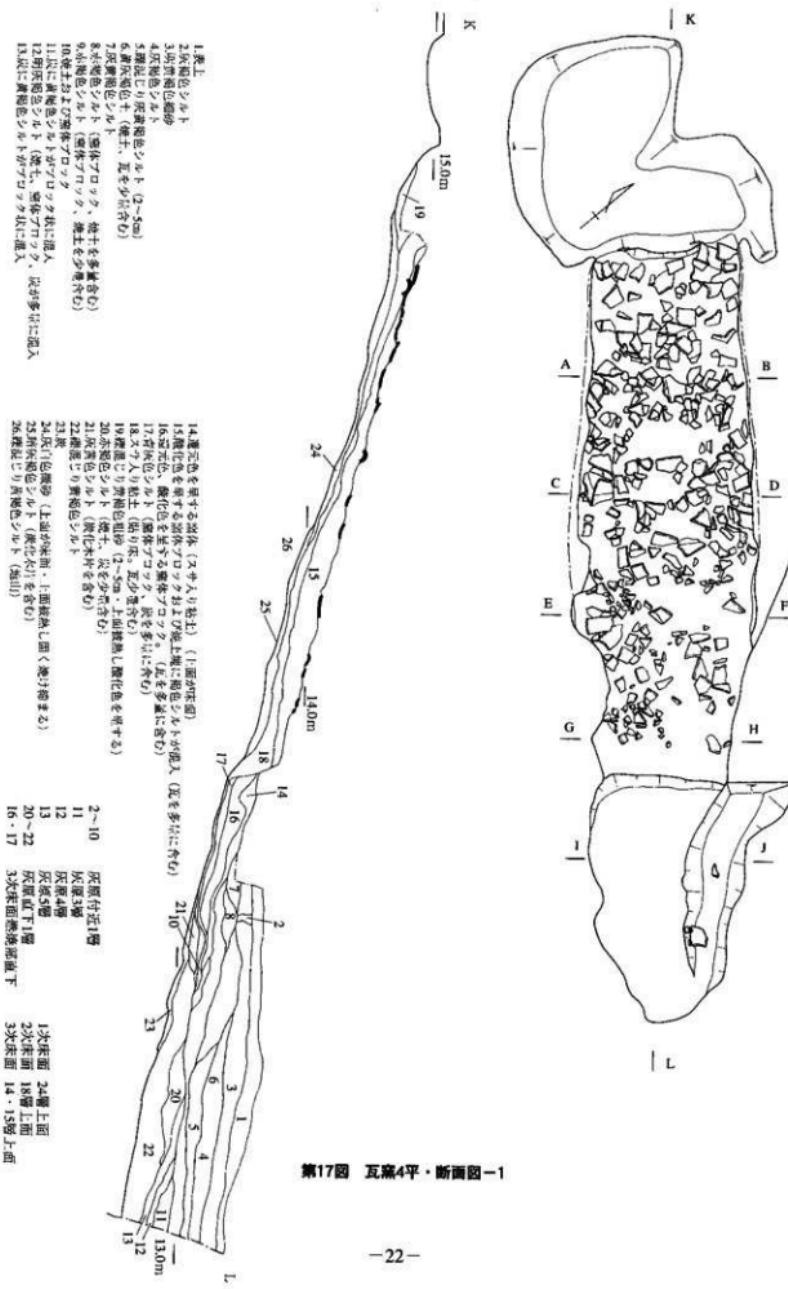
灰原2層(⑩層)では遺物は出土していない。

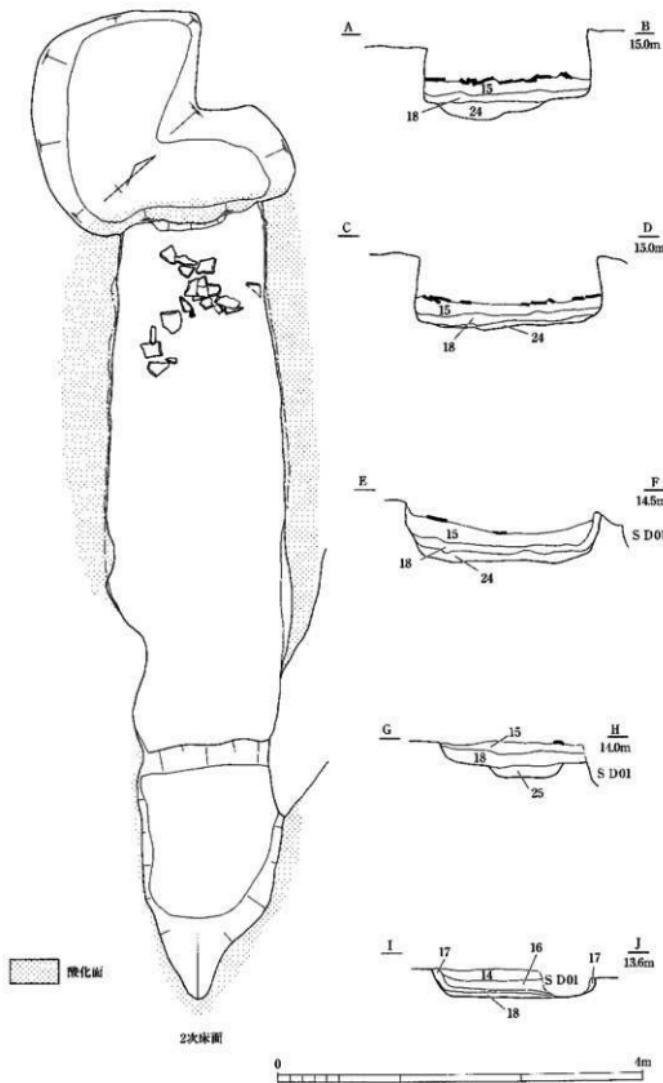
灰原3層(11~⑨層)の出土遺物は総重量85.05kg。約6割が平瓦である。丸瓦I形式、軒平瓦(第6図8)、平瓦I B・II A・II B・II C型式のほか、C型式の壇(第12図34)や鷲尾(第13図35)が出土している。平瓦では、II C型式が出土量のうち約8割を占める。

灰原4層(12~⑪層)の出土遺物は総重量1.6kg。極端に少ない。型式不明の丸瓦のほか、平瓦IA型式が出土している。

灰原5層(13~⑫層)の出土遺物は総重量0.5kg。極端に少ない。丸瓦I形式、平瓦II A・II B型式が出土している。

灰原直下1層(20~22~⑬層)の出土遺物の総重量2.4kg。丸瓦I型式、平瓦I F型式が出土している。





第18図 瓦窯4平・断面図-2

第4表 瓦窯4出土遺物

2次床面焼成部瓦数表

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
不明丸	0.3	4.1	—
丸I	2.05	28.5	—
不明平	0.45	6.3	9.4
平ⅠA b	1.35	18.7	27.8
平ⅡA	1.3	18.1	26.8
平ⅡB	1.2	16.7	24.7
平ⅡC	0.55	7.6	11.3
合計	7.2	100	100

3次床面焼成部瓦数表

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
土器類	0.6	0.4	—
不明丸	23.25	16.4	—
丸I	17.6	12.4	—
丸II	0.4	0.3	—
不明平	4.15	2.9	4.2
平ⅠA b	10.45	7.4	10.6
平ⅡA	5.1	3.6	5.2
平ⅡB	16.5	11.7	16.8
平ⅡC	62.1	43.9	63.2
製斗瓦	1.35	1	—
合計	141.5	100	100

3次床面燃焼部直下

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
土器類	0.2	1.2	—
不明丸	1.85	11	—
不明平	2.1	12.5	14.2
平ⅠA b	0.8	4.7	5.4
平ⅡA	0.15	0.9	1
平ⅡB	1.75	10.4	11.8
平ⅡC	10	59.3	67.6
合計	16.85	100	100

3. 燃焼部の構造

確認できた床面は2面。第17図の14層上面が3次床面、18層上面が2次床面となる。焼成部との間に、2次床面では約60cm、3次床面では約20cmの「隙」を持つ。とともに還元色に固く焼け締まり、スサ入り粘土を貼りつけることで、床面としている。いずれも平面形状は焚口の先端部が若干異なるのみで大きな違いはみられない。2次床面直上、3次床面直下にあたる16-17層が窯体ブロックや瓦片を多く含むことから、人為的に埋められた後床面となるスサ入り粘土(14層)を貼り、3次床面としたものと考えられる。

後述する焼成部では1次床面の痕跡を確認しているが、燃焼部ではそれに対応する床面は確認できない。燃焼部では、1次床面は、2次床面構築時に削平されているものと考えられる。

灰原付近1層

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
土器類	0.25	2	—
丸I	1.3	10.2	—
不明平	3.8	29.6	36.8
平ⅠA b	1.5	11.7	14.5
平ⅠB	1.1	8.6	10.6
平ⅡA	0.2	1.6	1.9
平ⅡB	1.15	9	11.1
平ⅡC	2.6	20.3	25.1
製斗瓦	0.9	7	—
合計	12.8	100	100

灰原1層

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
土器類	0.05	1.1	—
不明平	0.95	20	20.3
平ⅠA b	0.4	8.4	8.5
平ⅡA	0.65	13.7	13.8
平ⅡB	1.35	26.4	26.7
平ⅡC	1.35	28.4	28.7
合計	4.75	100	100

灰原3層

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
不明丸	13.15	15.5	—
丸I	8.4	9.9	—
不明平	3.25	3.8	6.7
軒平	6.15	7.2	—
平ⅠB	0.4	0.5	0.6
平ⅡA	0.55	0.6	1.1
平ⅡB	4.2	4.9	8.6
平ⅡC	40.35	47.4	62.8
不明磚	0.7	0.8	—
埴C	5.65	6.6	—
鍋底	2.25	2.6	—
合計	85.05	100	100

灰原4層

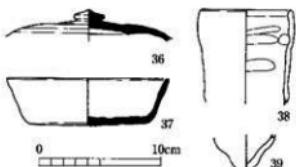
	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
不明丸	0.7	43.8	—
不明平	0.7	43.8	77.8
平ⅡA	0.2	12.5	22.2
合計	1.6	100	100

灰原5層

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
丸I	0.25	50	—
平ⅡA	0.1	20	40
平ⅡB	0.15	30	60
合計	0.5	100	100

灰原直下1層

	重量 (kg)	% (全體)	% (平瓦)
丸I	0.15	6.3	—
不明平	1.1	45.8	48.9
平ⅠF	1.15	47.9	51.1
合計	2.4	100	100



第19図 瓦窯4出土土器

P.L.6)。総重量16.85kg。約9割が平瓦である。製塙土器(第19図38・39)、型式不明の丸瓦、平瓦Ⅰ A · b · II A · II B · II C型式が出土している。平瓦ではⅡ C型式が約7割を占める。

5. 焼成部の構造

天井と考えられる被熱したスサ入り粘土が崩れ落ちた状態で検出した(P.L.4)。確認できた床面は3面。第17回の15層上面が3次床面、18層上面が2次床面、24層上面が1次床面となる。2・3次床面ともに、瓦片を床面に並べた状態(以下、「瓦敷き」と表記)が確認された。この瓦敷きを全点取り上げ、接合作業を行った結果、以下のことがわかった。

- ・いずれの瓦敷きでも、丸・平瓦・擬斗瓦が用いられていた。
- ・3次床面の場合、出土した瓦片数340点のうち、接合できたのは167点で、結果55点に復元できた。

- ・接合した55点のうち、3点以上の破片があわさったものは22点。

- ・接合した個体のうち完形品に復元されたものは数点のみ。
- ・接合できた破片は、出土位置が近接したものもあれば、4m以上離れたものなど規則性がない。

以上のことから、瓦敷きは、当初から割れた状態の瓦片を焼成部に持ち込んだものと考えられる。おそらく、灰原に散乱する焼き損じの瓦片を焼成部に持ち込んだのであろう。用途は、焼成前の生瓦を並べる際に安定させるための「焼き台」と考えれば理解しやすい。

24層上面を1次床面として捉えた。24層は上面が被熱し焼け締まっており、しかも燃焼部から焚口付近で2次床面より下層で炭層(23層)が確認されているためである。なお、1次床面である24層は焼成部上半でしか確認できない。消失した箇所は、2次床面である18層に切られた状態が観察できる。1次床面は、2次床面への改築時に、焼成部の一部を残し破壊されたことがわかる。

2度の改築を確認したが、それぞれの改築は何に起因するも

4. 燃焼部出土の遺物

3次床面燃焼部直下(16・17層)から遺物が出土して

いる(第4表、

のであろうか。1次床面から2次床面への改築は窯本体の拡張を志向したもの、2次床面から3次床面への改築は、規模の拡大が行われていないことから理由はそれ以外、老朽化や熱効率の改善など、構造上の欠点を克服することを志向したものといえる。推測でしかないが2次床面の構造上の欠点は、改変がみられた燃焼部「階」にあったのかもしれない。

6. 燃成部出土の遺物(第2・4表)

2次床面燃焼部瓦敷きの出土遺物は総重量7.2kg。約7割が平瓦である。丸瓦Ⅰ形式、平瓦Ⅰ A · b · II A · II B · II C型式が出土している。平瓦では、いずれの型式も3割弱であるが、II C型式のみ他型式より1割ほど多く割合を示す。

3次床面燃焼部瓦敷きの出土遺物は総重量141.5kg。平瓦が約6割を占める。丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式、平瓦Ⅰ A · b · II A · II B · II C型式、擬斗瓦(第12図31)、須恵器杯(第19図37)が出土している。平瓦では、II C型式が約6割を占める。須恵器杯は、瓦窯焼絶直後の3次床面出土で検出しており、出土状況(P.L.6)から瓦窯4の焼絶年代を示す資料のひとつと考える。平城Ⅲ～Ⅳか。

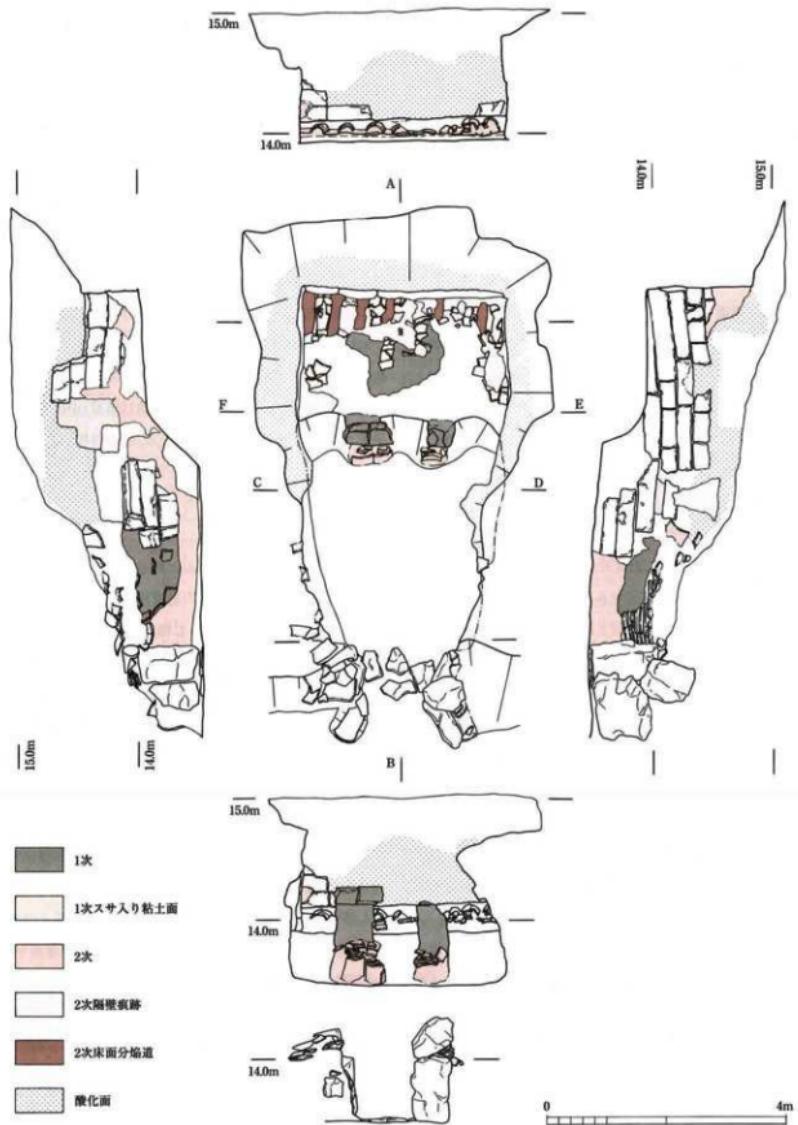
7. 置出しの構造

置出しへ、攪乱によりほとんど残っていないが、検出状況から構造が想定できる。燃焼部の奥壁両端に約20cmの煙道が2本確認できる。また、第17回K-L断面をみると2・3次床面には奥壁の立ち上がりが確認できる(P.L.7)。この奥壁の立ち上がりは、焼成部と煙道の間に「隔壁」が存在していたことを示すものと考えられる。つまり、攪乱を受けている箇所には「煙室」が存在しており、燃焼部とは側壁沿いに設置された2本の煙道でつながっていたと考えられる。

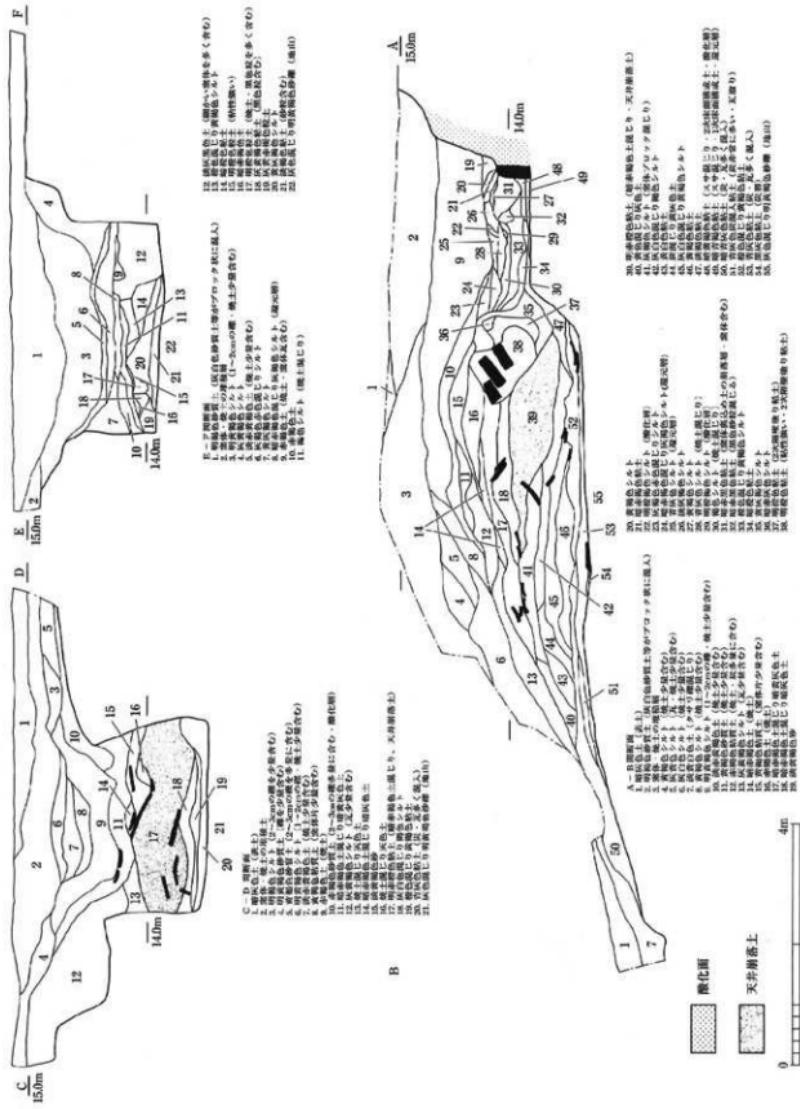
隔壁の肩には被熱による変色箇所がみられないことから、煙室はこの攪乱以上の大きさではなかったことがわかる。このことから「煙室」の規模は、最大でも長さ80cm程度、幅は焼成部と同程度と想定できる。

8. 小結

瓦窯4の構造は次の通り。燃焼部と焼成部との間に「階」がみられる。焼成部には「段」ではなく、瓦片を焼き台として利用していた。推測ではあるが、焼成部とは隔壁で隔てられた長さ80cm程の煙室を持つ。隔壁には2本の煙道がみられる。瓦窯4検出時に確認した天井は、スサ入り粘土で構成されていることから、半地下式の登窯であることがわかる。把握できた床面は3面。1次床面から2次床面への改築は規模の拡大を志向したもの、



第20図 瓦窯5平面図



第21図 瓦窓5断面図

2次床面から3次床面への改築は規模拡大以外の構造上の欠陥を改善することを志向したものと考えられる。各床面の時点での規模は2・3次床面では全長約9.3m、最大幅は焼成部で約1.7m程度である。1次床面の時点での窯の規模は、2次床面への改築に伴い削平されていることから不明である。

なお、1次床面における瓦窯4のおおよその規模を、縦断及び横断の断面から推測する。横断面をみると、第18図A—B間では1次床面である24層は、幅約80cmと2次床面の約半分ほどでしかない。しかも断面形状が半円形であることから、おそらく焼出し付近と考えられる。また、同図E—F間では2次床面より30cm程狭い程度であることから焼成部であろう。1次床面である24層は長軸方向に3.6m程しか残されていないが、2次床面焼成部直下で確認された炭層(23層)が1次床面に対応する灰原と考えると、1次床面の規模は長さ7.2m以内、焼成部の最大幅が1.4m程と想定できる。さらに焼出し付近と考えられるA—B間における24層の断面形状は半円形を呈する。煙室を持つ2・3次床面とは異なることから、1次床面の時点では、煙室をもたない構造であった可能性が想定できる。

第4節 瓦窯5(第20・21図、P.L. 9~14)

瓦窯5は瓦窯4の北東約6mの地点において確認された隔壁を有する半地下式平窯である。天井部を除くすべてが残存しており、その構造及び変遷を知ることができた。瓦窯本体のほか、前庭部や焼成室北方において排水溝(S D01)が確認された。

瓦窯は地山である灰色混じり明黄褐色砂礫層を剥り貰いて築かれている。南東に向かって開口し、主軸はN40°Wに向ける。焚口から焼成室裏壁までの全長3.7m、焚口幅0.6m、焼成室長さ1.65m、最大幅1.65m、残存高1.0m、焼成室長さ1.0m、最大幅1.75m、残存高0.9mを測るものである。以下細部について述べる。

1. 前庭部

前庭部は残存状態が悪く、かつ南端部については調査区外へと伸びるため、平面的なひろがりは明確でないが、焼成室より続く炭や瓦を多く含む青灰色または黒灰色を呈する粘土層が焚口より南へ、南北約3m東西約2mの範囲にひろがっていた。断面観察によると焚口直近から南へ2m程の範囲では概ね水平な堆積をみせるが、やがて地山の傾斜に合わせて緩やかに南に下る。本来はさらに南に続いていたものと考えられる。

同層からは総重量98.1kgの遺物が出土した。遺物は土器(42)が僅かに含まれるが、ほとんどが丸、半瓦である。うち平瓦が全体の92.1%を占める。丸瓦はI型式のみであり、平瓦はI型式及びII型式がいずれも10%に満たず、III型式が77.6%を占める。

2. 焚口

幅60cm、残存高60cm、敷石上面での標高13.5mを測る。両側に高さ50cm、幅30cmの花崗岩を立てている。上部構造は東側花崗岩の上に残存する和泉砂岩から考えて、これらが鳥居形に組み合うものであることは間違いない。焚口から前庭部に向かってはハ字状に開いているが、その構造は東西で若干異なり、東側では花崗岩の前方に幅50cm、高さ40cmの和泉砂岩が立てられているのに対し、西側では粘土面上に平瓦などを貼り付けて形成している。

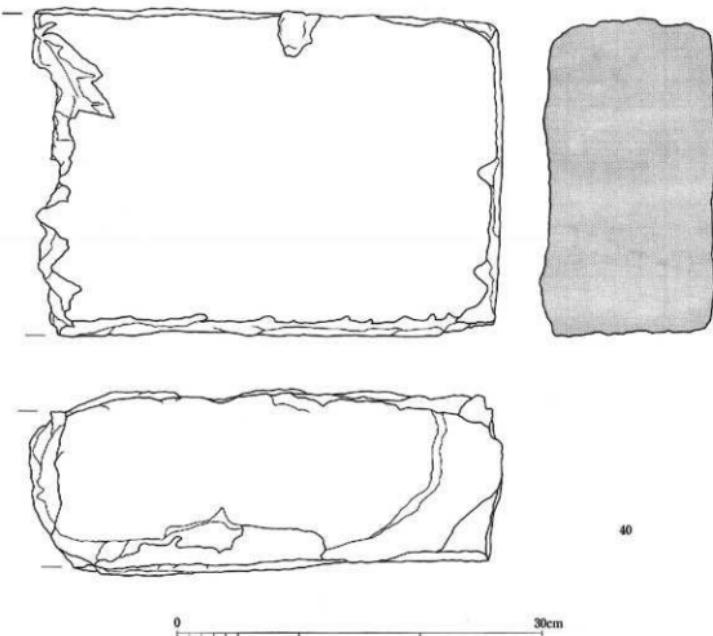
焚口床面には幅15~30cm、長さ15~25cmの板状の砂岩を4つ敷く。床面直上には前庭部へと続く青灰色粘土層がひろがっており、その直上に堆積した黄褐色粘土層より軒丸瓦(6)が出土している。

3. 燃焼室

燃焼室は床面の幅1.1~1.65m、長さ1.65m、残存高1.0mを測り、平面形状はいびつな台形を呈する。床面の標高は13.5mを測る。床面は平坦で特別な装置は認められない。地山である砂礫層が被熱し、全体に暗赤褐色を呈している。床面直上には前庭部へと続く青灰色粘土層が薄く堆積している。

燃焼室壁面の構造は、焚口から燃焼室中央付近までは、破砕した平瓦の凸面を上に向け、側縁を揃えて平積みされ、天井部に向かって徐々に内湾する。瓦の間はスサ入り粘土で固定され、一番残りの良いところでは13段の瓦が積まれていた。瓦積みの表面は粘土上で上塗りされているが、この粘土表面は床面に近いところほど残りが良く、また一部に重複する粘土面が確認された。補修に伴うものであろう。

燃焼室中程から「階」までは、高さ15cm、長さ55cmを測る粘土ブロックが積まれている。このブロックはあらかじめ成形したスサ入り粘土を自然乾燥させた「日干しレンガ」(以下、粘土ブロックと称する)状のものであるが、この粘土ブロックは表面や側面については明確な面を持つが、背面に関しては明瞭でない。生乾きに近い粘土ブロックを、裏込め土に押し付けつつ積上げたものと理解される。これは焼成室を構成する粘土



第22図 瓦窯5隔壁部材

ブロックにも共通するものである。なお後述する2次の隔壁にも長大な日干しレンガが用いられているが、この日干しレンガは6面が明瞭な面を持っており、隔壁粘土ブロックとは成形の厳密さが異なる。さて、これら粘土ブロックは瓦積みと同様に地山の直上から積まれており、最も高い所で4段の粘土ブロックが、ほぼ水平に積まれている。部分的に粘土ブロックの表面にさらに粘土を塗る箇所もある。また粘土ブロックを用いず、スサ入り粘土を直接塗っている箇所もあるが、これは粘土ブロックの規格に合わない「隙間」を埋めるためであったと推測される。粘土ブロックやスサ入り粘土は被熱のため、表面が著しく剥落している箇所があり、東壁では平瓦をスサ入り粘土によって貼り付け、補修している。

天井部は失われているが、検出時の肩部分に多量の瓦が積まれていること、更に燃焼室埋土に窓体の固着した大量の瓦が含まれていることから、天井部は瓦をスサ入り粘土で固め

つつ、中央に向かって持ち送りしながら架構していたものと判断される。

燃焼室側壁及び肩部の瓦を型式別にみてみると、平瓦Ⅰ型式及びⅡ型式で全体の52.5%を占め、平瓦Ⅲ型式は12.1%、丸瓦Ⅰ型式が19.8%であった。また肩にはⅡA型式の軒丸瓦(5)が積まれていた。同様に崩落天井を構成するものとして認知された遺物は、総重量46.15kgあるが、若干の土器(41)が含まれるほかは、丸瓦Ⅰ型式が24.1%、平瓦Ⅰ型式が36.6%、Ⅱ型式が30.7%、堆が4.6%であった。平瓦が全体の71.2%を占めており、天井部の架構にあたっては主体的に平瓦が用いられたものと考えられる。ほかにⅠB型式の軒丸瓦(4)が1点含まれていた。

4.隔壁

燃焼室と焼成室との間には、比高差40cmを測る「階」が存在している。検出時「階」の斜面部分は基本的に地山そのままの

第5表 瓦窯5出土遺物

焚口

	重 量 (kg)	% (全 体)	% (平 瓦)
不明丸	0.4	2.7	—
平Ⅰ A b	9.9	65.1	66.9
平Ⅱ C	2.5	16.4	16.9
平Ⅲ	2.4	15.8	16.2
合 計	15.2	100	100

燃焼室埋土

	重 量 (kg)	% (全 体)	% (平 瓦)
丸 I	4.9	21.8	—
不明平	4.5	20	25.6
平Ⅰ A b	9.1	40.4	51.7
平Ⅰ B	0.5	2.2	2.8
平Ⅱ A	0.4	1.8	2.3
平Ⅱ C	3.1	13.8	17.6
合 計	22.5	100	100

焼成室天井部

	重 量 (kg)	% (全 体)	% (平 瓦)
土器類	0.05	0.1	—
丸 I	11.1	24.1	—
不明平	1.8	3.9	5.4
平Ⅰ A b	16.6	35.9	50.5
平Ⅰ F	0.3	0.7	0.9
平Ⅱ B	0.1	0.2	0.3
平Ⅱ C	14.1	30.5	42.9
博 A 2	2.1	4.6	—
合 計	46.15	100	100

燃焼室及び前部埋土

	重 量 (kg)	% (全 体)	% (平 瓦)
土器類	0.15	0.2	—
丸 I	7.6	7.7	—
不明平	10.35	10.5	11.5
平Ⅰ A b	6.05	6.2	6.7
平Ⅱ C	3.8	3.9	4.2
平Ⅲ	70.15	71.5	77.6
合 計	98.1	100	100

燃焼室側壁

	重 量 (kg)	% (全 体)	% (平 瓦)
丸 I	7.7	19.8	—
不明平	6.1	15.6	19.5
平Ⅰ A b	16.4	42.2	52.6
平Ⅰ B	0.6	1.5	1.9
平Ⅰ F	0.2	0.5	0.6
平Ⅱ B	0.3	0.8	1
平Ⅱ C	2.9	7.5	9.3
平Ⅲ	4.7	12.1	15.1
合 計	38.9	100	100

分焰柱

	重 量 (kg)	% (全 体)	% (平 瓦)
丸 I	1.5	10.9	—
不明平	0.2	1.5	2.9
平Ⅰ A b	0.4	2.9	5.6
平Ⅱ C	2.9	21.2	40.8
平Ⅲ	3.6	26.3	50.7
不明磚	5.1	37.2	—
合 計	13.7	100	100

状態であったが、西分焰孔においてのみ地山直上に埠をおき、スサ入り粘土で完全に塗り込められている状況が確認された。これによって斜面部分は10cm程度嵩上げされている。

「附」には2本の分焰柱が設けられ、3本の分焰孔が開口している。分焰孔は西側よりそれぞれ幅30cm、25cm、40cmを測る。

分焰柱及び隔壁は燃焼室側と焼成室側で大きく構造が異なっていることが確認された。まず焼成室側では、「附」の上端部において地山を予め半円形に削り出し、その上端に沿うようにスサ入り粘土の塊をおき高さ35~40cm、幅25~30cmの分焰柱としている。西側の分焰柱の上には幅10cm、高さ15cm、残存長40cmの粘土ブロックが残存していた。粘土ブロックは両端を欠くが、本来は焼成室隔壁まで伸び、隔壁の一部を構成していたものと考えられる。

燃焼室側の分焰柱は、燃焼室床面「附」斜面への取り付け部から丸瓦や平瓦をスサ入り粘土によって積み上げて構築して

いる。より残存状態の良好な西側分焰柱によると床面から「附」斜面にスサ入り粘土を積み上げ、その周囲に丸瓦と平瓦をそれぞれ貼り付け基底部とし、その上に更に瓦片を積み上げて分焰柱としている。この分焰柱の上に乗る隔壁部分が燃焼室側に倒れ込んだ状態で確認された。隔壁は高さ14cm、幅26cm、長さ90cmの直方体を呈する日干しレンガ(40)を積み上げて構築されており、積み上げる際、下から3段目までは垂直に積み、4段目、5段目については燃焼室側に徐々に持ち送るようにして積み上げている。5段目のレンガは端中央において粘土の目地が確認されることから、そこで6段目の2本のレンガが合わさっていたものと判断される。さらにこれらは燃焼室隔壁にみられる剥離痕により、隔壁にまで達していたものと考えられる。それぞれの日干しレンガはスサ入り粘土によって固定され、さらに積み上げられたレンガ全体を覆うように粘土が塗布されていた。

燃焼室側の分焰柱及び分焰孔を構成する遺物には、丸瓦、平瓦、埠が認められ、総重量は13.7kgを測る。これらを型式別にみてみると、丸瓦Ⅰ型式10.9%、平瓦Ⅰ型式2.9%、Ⅱ型式21.2%、Ⅲ型式26.3%である。

5. 燃成室

燃成室は「階」上端より奥行き1.0m、最大幅1.75mの長方形を呈する。床面の標高は13.95mを測る。北東隅において床面よりの高さ90cmまで残存していた。側壁は地山直上より粘土ブロックを積み上げて構築されている。粘土ブロックは高さ15cm、幅10cmで、長さは55cmのものと20~40cmを測るものがある。奥壁も同様に粘土ブロックにより構築されており、検出された範囲内では煙出しは認められなかった。これらの粘土ブロックの表面には厚さ約3cmの粘土が塗り付けられ、補修されている箇所も認められるが、燃成室に比べるとその範囲は僅かである。

床面の状態は悪く、製品と認識されるものは皆無であった。それでも2面の床面が確認され、窯改造の変遷を辿ることができた。

1次面は地山面に厚さ約5cmの粘土を貼り、平坦面をなす。被熱により還元色を呈することから、1次段階での操業の痕跡と捉えることが可能である。

2次面は、1次面の上に平瓦及びスサ入り粘土を敷いて嵩上げし、さらに丸瓦を中軸に平行に6本以上並べて分焰柱を築いている。分焰柱の間には黒色化した分焰道部分が明瞭に確認され、それから復元すると分焰柱の数は8本であり、それらはおおよそ10cmの等間隔で並んでいたことがわかる。分焰柱は残存高10cm、幅15cmを測り、長さについては明確ではないが、2次面に伴う瓦敷きやスサ入り粘土の痕跡から考えて、「階」上端付近まで伸びていたものと想定される。分焰柱に用いられていた丸瓦にはⅠ型式とⅢ型式両方があり、Ⅱ型式のものは玉縁を奥壁に接するように並べていた。先にも述べたが、分焰柱の接する奥壁部分では、最下段の粘土ブロックがすべて残存しており、その範囲内に煙出しは確認されなかった。また奥壁に接する裏込め土にも何らかの痕跡は確認されなかった。よって瓦窯5の煙出しは燃成室天井部に求められる。

6. S D 01(第14~24図、P L. 9~14・21)

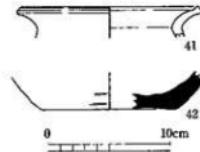
瓦窯5の北で確認された直線溝で、斜面上部の平坦地より発し、斜面下の瓦窯4灰原付近に達する。ただし瓦窯4を切ってい

るため、斜面部分においてはその範囲を確認したにすぎない。瓦窯5奥壁中軸から距離は約4mを測る。上面輪0.6~1.2m、長さ18m、検出面よりの深さ0.8~1.2mを測る。瓦窯5の北方平坦地から発し、西へ約4.8m進んだ地点では直角に曲がり、南へ8m伸びる。斜面ではわずかに東に湾曲しながら伸び、溝の南端から1.4mの範囲において瓦窯4の燃焼部を切っている。底部は概ね平坦であり、斜面上部での標高は14.0~14.2mを測る。断面形状は、溝の東端より西へ2.6mの地点(第15図、A-B断面)では深いU字状を呈しているのに対し、斜面上端より北へ3mの地点(C-D断面)ではY字状を呈し、より深く掘り込まれている。埋土は、最下部に溜水があったことを示す灰白色粘土が薄く堆積している箇所もあるものの、それ以外については大きく3層(上層、中層、下層)に分けることができる。これらを基準に遺物を取り上げた。

出土遺物には須恵器(45~55.70)、土師器(44.56~69)、黒色土器(43)、瓦、石製品(71)、石材などが出土した。うち石材については図示していないが、凝灰岩片がまとまって出土している。いずれも拳程度の破片であるが、明らかに面を持つものも含まれており、何らかの製品、もしくは加工の工程で出た碎片ではないかと考えられる。

須恵器

杯(46~49、51.52)、蓋(45.50)、皿(53)、壺(54.70)、瓶(55)が認められた。杯には平底の底部よりわずかに外反しながら立ち上がるものの(49)、高台を有するものの(46~48.51.52)があり、高台を有するものの中には底部から直線的に立ち上がるものの(46.47)、直線的に立ち上がり口縁部が外反するものの(48)、僅かに内湾しながら立ち上がるものの(51)がある。蓋はいずれも中心部を欠くが、天井部にはつまみが付くものと思われる。53は皿である。平底を呈する底部より外反しつつ立ち上がる。壺には肩部より外反しながら垂直に立ち上がる口縁のものと、外反しながら大きく外へ開く口縁を持つものがある。70の外面には平行タキの後、ナデが施され、内面には同心円文状の充て具痕がみられる。55は瓶である。高台を有する底部より緩やかに内湾しつつ立ち上がる。



第23図 瓦窯5出土土器

土器器

杯(56、57、61~63)、高杯(64)、皿(58~60)、壺(65~68)、飯蛸壺(69)が認められた。杯はいずれも平底を呈するが、底部より外反しつつ直線的に立ち上がるもの(57, 62)と緩やかに湾曲しながら立ち上がるものがある。64は高杯脚部である。ヘラケズリによって面取りされ、横断面は12角形を呈する。壺には口径25cmを超える大型のもの(65, 68)と、口径18cm前後のもの(66)、13cm前後のもの(67)がある。68は直線的に立ち上がる胴部より大きく外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸く納める。69は釣鐘型を呈する飯蛸壺である。

43は黒色土器A類概である。底部にハ字状に聞く高台を持ち、体部は僅かに内湾しながら直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し端部は丸く納める。内面及び見込みにヘラミガキが施され、見込みには平行線状のヘラミガキが施される。44は土器師壺である。肩張りの胴部からく字状に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ、面を持つものである。

71は砥石である。長さ13.9cm、最大幅2.7cm、厚さ1.9cmを測る弓棒状の製品で、断面形状は台形に近い歪んだ6角形を呈する。長軸の一端にわずかに破断面を残しているが、ほとんどの面は研磨により平滑もしくはレンズ状に磨んでいる。材質は砂岩であり、重量100gを測る。

以上、S D01の状況を述べてきた。最後に S D01の性格であるが、調査時瓦窯5内部には激しい湯水があり、仮に窯の操業時も同様であったとすれば、その稼動是不可能であったろう。ところが調査の進展に伴い S D01を底部まで掘削すると窯内部の湯水が止まった。これらのことから考えて S D01は、窯内部の湯水を遮断するために設けられた排水溝であると判断される。築造時に判明した湯水に対処するために掘削されたものであろう。換言すれば、瓦窯5にとって S D01の開溝は操業するための必須条件であり、操業期間中に S D01が埋没、もしくはその途上であったとは考えられない。このことは S D01出土の古代に属する遺物に層位的な時期差がみられないことと矛盾しない。つまり S D01は短期間で埋め立てられた可能性が高いのである。一方、S D01の埋土最上部からは、時期的に隔たりのある黒色土器なども出土している。これらは言うまでも無く S D01の埋没時期の上限を示すものであるが、S D01より地形的に低い瓦窯群の出土遺物には同時期のものが

全く含まれていないことから、これらは S D01埋没の最終段階で含まれたものと考えるのが妥当であろう。

7.小結

これまでに述べてきたように、瓦窯5の各所において窯改造または窓の補修に関する痕跡が見出された。これらの情報をもとに瓦窯5の変遷について、あらためて確認しておきたい。

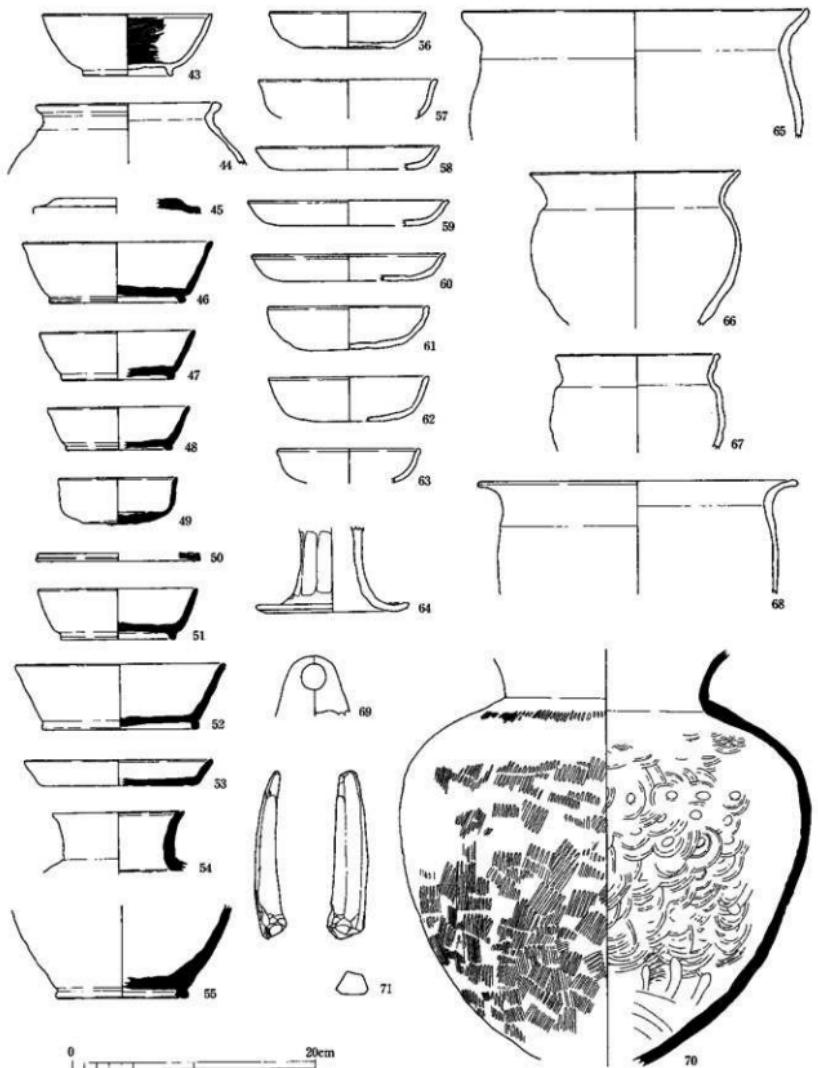
1次は「階」上端に設けられた分焰柱に薄い隔壁を伴うものであった。焼成室床面は平板である。確実に製品と判断される遺物はないが、焼成室1次床面が還元色を呈するまでに被熱していたことから、1次構造をもって焼成が行われた蓋然性は高い。また2次分焰柱に他の瓦窯では焼成していないと考えられる平瓦Ⅲ型式を用いていることも、1次時点での操業を裏付けるものであろう。

2次においては分焰柱を焚口方向に追加、拡大し、その上に新たな隔壁を設置している。焼成室においても床面を嵩上げし、分焰柱が追加されている状況が明らかとなった。無肺窯から有肺窯への改造である。2次構造において注目されるのは、分焰孔は1次を踏襲し3本であるのに対し、分焰牀が8本と、それぞれの数が対応していない。有肺窯を志向しつつも、定型化した構造とはなりえていないのである。

また今回の調査では隔壁の拡大と焼成室の改造が同時期に行なわれたという確証は得ることができなかった。上述した組み合わせ以外に、隔壁も分焰牀も持たない平窯から隔壁を有する有肺窯へと改造された可能性も考えられる。しかし、いずれにしても出土遺物からは時期差は伺うことができなかつた。1次窯の操業と2次窯への改造、2次窯での操業は隔たり無く行なわれたものと判断される。

註解

①古代の土器研究会『古代の土器 I 基礎の土器集成』(1992)



上部(43~45·54~56~59~65~67~69~71)、中層(46~49·55~60~62~64~68~70)、中下層(50~53)、下層(63)

第24図 S D 01出土遺物

第4章 まとめ

第1節 各瓦窯の製品(第14~17図、第2~6表)

1. 資料操作の前提

各瓦窯とも、焼成部・室の床面に操業時の製品は遺存しておらず、どの型式の瓦塊類を焼成していたのかは直接的な資料から判断できない。ここでは、各瓦窯から出土した瓦塊類の出土量及び比率をもとに、各瓦窯で焼成された瓦塊類を推測する。なお、以下で扱う資料には、次の難点が指摘できる。

・いずれの瓦窯においても、操業当時に焼成した瓦塊類は、焼成部・室に遺存していなかった。

・瓦窯3の遺物は廃絶後の理土から出土したものである。

・瓦窯4は窯本体の遺存状況はよいものの、灰原は調査区外に広がっているため、資料は一部にすぎない。

・瓦窯5は窯本体の遺存状況はよいものの、灰原は遺存していない。

つまり、ここで扱う資料は、検出した瓦窯の操業形態のすべてを反映しているとは言い難い。上記の資料的制約を認識し、各瓦窯で焼成された製品とその年代及び各瓦窯の操業年代について、以下に想定を行なうものである。

2. 層位からわかること

まず、出土した瓦塊類が、今回検出した瓦窯のうち、いずれの瓦窯で焼成されたもののかを、層位関係から限定する。

・炭層直上(第14図、P L. 5)

瓦窯3床面直上に堆積した炭層(5層)の上層にあたる層位。炭層直上は、瓦窯3を削平した後、瓦窯4の灰原(灰原1~5層)形成以前に堆積したものである。出土遺物は瓦窯5の製品ではない。瓦窯3床面向上層の資料ではないので層位的な視点だけでは瓦窯3の製品であるとは判断できない。削平された瓦窯3が瓦窯4操業直前まで窯みとして残っていれば、瓦窯4の製品が埋没することもあるためである。よって出土遺物は、瓦窯3もしくは瓦窯4の製品と考えられる。

・灰原直下1層(第16~17図、P L. 8)

瓦窯4の1次床面削平後、2次床面構築以前の堆積で、瓦窯3の廃絶・削平後に堆積した層位。このことから、灰原直下1層出土の遺物は、瓦窯5及び瓦窯4・2次床面以降の製品ではない。よって出土遺物は瓦窯4・1次床面操業時、もしくは瓦窯3の製品と考えられる。灰原直下1層は、炭・焼土・窯片体の混入其合が灰原各層とは明らかに異なることから、1次床面削平後の

盛土など二次的な堆積の可能性が高い。

・灰原1~5層(第16~17図、P L. 8)

瓦窯4の2次床面以降で瓦窯4廃絶以前に堆積した層位。S D 01と瓦窯4の切り合い関係が示すように、瓦窯5の操業開始は瓦窯4の廃絶後であることから、これらの層位から瓦窯5の製品は出土しない。よって出土遺物は、瓦窯3・4の製品と考えられる。

・2・3次床面焼成部瓦敷き(第17~18図、P L. 6)

瓦窯4焼成部で構造物として利用されていたもの。瓦窯5の製品は出土しない。出土遺物は、瓦窯3もしくは瓦窯4廃絶以前の製品と考えられる。

・3次床面燃焼部直下(第17図、P L. 6)

最終床面である3次床面構築以前、下層の2次床面廃絶以後の堆積。瓦窯5の製品は出土しない。出土遺物は、瓦窯3もしくは瓦窯4・2次床面以前の製品と考えられる。

・灰原付近1層(第16~17図、P L. 8)

瓦窯4の灰原直上、表土直下の層位。今回検出したすべての瓦窯の製品が出土する可能性がある。

・前庭部埋土(第21~22図)

瓦窯5の前庭部から燃焼室床面にかけて堆積した層位。瓦窯廃絶直後に堆積した層位で、操業当時の廃土ではない。今回検出したすべての瓦窯の製品が出土する可能性がある。

・燃焼室側壁(第20~21図、P L. 11)

瓦窯5の燃焼部側壁部材として用いられたもの。瓦窯5構築当初からの構造物であるが、操業時の補修も考えられるため、今回検出したすべての瓦窯の製品が出土する可能性がある。

・分縫柱(第20~21図、P L. 13)

瓦窯5の分縫柱部材として用いられたもの。操業後の補修も確認されていることから、今回検出したすべての瓦窯の製品が出土する可能性がある。

・S D 01(第15図、P L. 14)

瓦窯5排水溝の理上、排水溝という機能的な面を重視すると、瓦窯5の廃絶後に埋没がはじまった可能性が高い。上部(最上層)出土の遺物は瓦窯5の廃絶時期の下限を示す。今回検出したすべての瓦窯の製品が出土する可能性がある。また、瓦窯5の廃絶後に S D 01が埋没するまで、時間差があった場合年代に隔たりのある後世の瓦塊類が出土する可能性がある。

3. 層位と平瓦各型式の出土比率からわざること(第6表)

先にみた層位関係から限定できた結果と、平瓦各型式の出土比率を併せることで、今回検出した各瓦窓で焼成した瓦塊類をさらに限定する。ここで扱う平瓦各型式の出土比率は二種類。各層位ごとの型式別出土比率と、型式ごとの層位別出土比率である(第6表)。

なお、丸瓦については、行基・玉縁の2型式でしか分類・計量しておらず、出土したのもⅠ型式がほとんどであったので、平瓦と同様の比較は不可能と判断した。検討の対象とはしていない。

・瓦窓3の製品

瓦窓3の操業時期に最も近い層位である炭層直上から出土した瓦塊類は、平瓦ⅠA・B・F、ⅡA・B型式。平瓦のうち高比率を示した型式は、ⅡA(39.8%)及び平瓦ⅡB(34.6%)。型式ごとの層位別出土比率でも平瓦ⅡA型式はもっとも高い比率(62.4%)で、平瓦ⅡB型式も32.2%と高比率を示す。層位的な点からは判断がつかないが、後述する平瓦ⅡA・Bのその他の層位における出土比率から判断すると、断定はできないが、平瓦ⅡA・B型式は、瓦窓3の製品である可能性が高い。

・瓦窓4の製品

瓦窓4の操業時の施土である灰原1~5層から出土した瓦塊類は、軒平瓦、平瓦ⅠA・B・F、ⅡA・B・C、塙C、鷺尾である。

軒平瓦、塙C、鷺尾は、他の層位で出土していないことから瓦窓4で焼成されたと考えられる。

次に平瓦各型式についてみてみる。瓦窓3層は出土遺物の総重量が85.05kgで、灰原5層(0.5kg)や灰原4層(1.6kg)と比較しても遺物量が豊富であることから、最も信頼性が高い資料といえる。灰原3層出土の平瓦のうち、最も高比率を示した型式はⅡC型式で、各層位で出土した平瓦ⅡC型式の28.1%を占め、3次床面焼成部瓦敷きの43.3%に次ぐ比率である。また、平瓦ⅡC型式は、瓦窓4・2次床面操業以前の灰原直下1層と炭層直上からは出土していない。瓦窓4焼成後の堆積である前庭部理土とS D01では平瓦ⅡC型式の出土比率はいずれも低い。つまり、平瓦ⅡC型式は、瓦窓4・2次床面操業時以降に瓦窓4で焼成されたと考えられる。

瓦窓4では、平瓦Ⅲ型式以外のすべての型式が出土している。操業期間内に異なる型式の平瓦を焼成していたのであろうか。

まず、各床面と灰原各層の対応関係を以下にみる。先に見た

ように平瓦ⅡC型式は、灰原3層で出土した平瓦のうち82.8%を占める。同様に、平瓦ⅡC型式が高い割合を示す焼成部床面瓦敷きは、3次床面焼成部瓦敷き(63.2%)である。前章で述べたように、焼成部瓦敷きが、当時灰原に散乱する焼き折じの瓦片を敷並べたものであれば、灰原3層堆積後に3次床面焼成部瓦敷きが形成されたと考えることができる。つまり、灰原3層は2次床面操業時の施土であると考えられる。加えて、瓦窓4縦断面(第17図K-L間)をみると、灰原4・5層も層位的に2次床面に対応すると考えてよい。灰原3・4・5層=2次床面という対応関係を対応すると、3次床面には灰原1・2層が、1次床面には灰原とは認識していないが灰原直下1層がそれぞれ対応すると考えられる。

次に、各床面に対応する層位で出土した平瓦各型式が、瓦窓4で焼成されたものかどうか、平瓦各型式の出土比率(第6表)をもとに想定する。

1次床面操業時に対応する層位は、1次床面削平直後の堆積である灰原直下1層であるが、出土した平瓦の重量が2.25kgと少なく、平瓦ⅠF型式のみ出土した。平瓦ⅠF型式は、全体でも2.15kgしか出土しておらず、資料的に難点がある。瓦窓4で焼成していたとは認め難い。

2次床面に対応する灰原4・5層では、平瓦ⅡA・B型式が出土している。灰原4層では平瓦ⅡA型式が22.2%、灰原5層では平瓦ⅡA型式が40%、平瓦ⅡB型式が60%を占める。いずれも各層位ごとの型式別出土比率は高いが、灰原4層出土の平瓦ⅡA型式は0.9%、灰原5層出土の平瓦ⅡA・B型式とも0.4%。型式ごとの出土層位別の比率はいずれも1%を切る。しかも、いずれも遺物の出土量は1kg未満と極端に少なく、資料的に難点がある。平瓦ⅡA・B型式は瓦窓4で焼成していたと判断できない。

3次床面操業時に対応する灰原は、灰原1・2層である。灰原2層からは遺物は出土していない。灰原1層で出土した瓦塊類は平瓦ⅠA・B、平瓦ⅡA・B・C型式である。このうち高比率を占めるのが、ⅡA型式(13.8%)とⅡB型式(28.7%)である。ただ、型式ごとの出土層位別の比率は、ⅡA型式が2.8%、ⅡB型式が3.4%。いずれも4%以下である。しかも、灰原1層出土遺物の総重量は4.7kgと少ないため、資料的に難点がある。平瓦ⅡA・B型式は瓦窓4・3次床面で焼成していたと判断できない。

残る型式は平瓦ⅠA・B・I B型式であるが、平瓦ⅠA・B型式

第6表 平瓦各型式の出土比率

重量 (kg・50g未満は切り上り)

kg	炭層直上	灰原付近1層	灰原付近1層	灰原付近1層	分岐柱	燃焼室及び前庭部埋土	SD 01	合計								
不明平	4.25	1.1	0	0.7	0.45	3.25	2.1	4.15	0.95	3.8	6.1	0.2	10.35	24.5	61.9	
平ⅠA b	3.65	0	0	0	1.35	0	0.8	10.45	0.4	1.5	16.4	0.4	6.05	25.9	66.9	
平ⅠB	0.7	0	0	0	0	0.4	0	0	0	1.1	0.6	0	0	1.2	4	
平ⅠF	0.8	1.15	0	0	0	0	0	0	0	0	0.2	0	0	0	0	2.15
平ⅡA	14.55	0	0.1	0.2	1.3	0.55	0.15	5.1	0.65	0.2	0	0	0	0	0.5	23.3
平ⅡB	12.65	0	0.15	0	1.2	4.2	1.75	16.5	1.35	1.15	0.3	0	0	0	0	39.25
平ⅡC	0	0	0	0	0.55	40.35	10	62.1	1.35	2.6	2.9	2.9	3.8	17	143.55	
平ⅡCか平Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	29.35	29.35	
平Ⅲ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.7	3.6	70.15	20.9	99.35	
合 計	36.6	2.25	0.25	0.9	4.85	48.75	14.8	98.3	4.7	10.35	31.2	7.1	90.35	119.4	469.75	

%-1 (各層位の総重量に占める型式ごとの割合)

%	炭層直上	灰原付近1層	灰原付近1層	灰原付近1層	分岐柱	燃焼室及び前庭部埋土	SD 01								
不明平	11.5	48.9	0	77.8	9.4	6.7	14.2	4.2	20.3	36.8	19.5	2.9	11.5	20.6	
平ⅠA b	10	0	0	0	27.8	0	5.4	10.6	8.5	14.5	52.6	5.6	6.7	21.7	
平ⅠB	1.9	0	0	0	0	0.8	0	0	0	10.8	1.9	0	0	1	
平ⅠF	2.2	51.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0.6	0	0	0	0
平ⅡA	39.8	0	40	22.2	26.8	1.1	1	5.2	13.8	1.9	0	0	0	0	0.4
平ⅡB	34.6	0	60	0	24.7	8.6	11.8	16.8	28.7	11.1	1	0	0	0	0
平ⅡC	0	0	0	0	11.3	82.8	67.6	63.2	28.7	25.1	9.3	40.8	4.2	14.2	
平ⅡCか平Ⅲ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24.6
平Ⅲ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15.1	50.7	77.6	17.5	100	
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

%-2 (各型式の絶重量に占める層位ごとの割合)

%	炭層直上	灰原付近1層	灰原付近1層	灰原付近1層	分岐柱	燃焼室及び前庭部埋土	SD 01	合計								
不明平	6.9	1.8	0	1.1	0.7	5.2	3.4	6.7	1.5	6.1	9.8	0.3	16.9	39.6	100	
平ⅠA b	5.5	0	0	0	2	0	1.2	15.6	0.6	2.2	24.5	0.6	9	38.8	100	
平ⅠB	17.5	0	0	0	0	10	0	0	0	27.5	15	0	0	30	100	
平ⅠF	37.2	53.5	0	0	0	0	0	0	0	0	9.3	0	0	0	0	100
平ⅡA	62.4	0	0.4	0.9	5.6	2.4	0.6	21.9	2.8	0.9	0	0	0	0	2.1	100
平ⅡB	32.2	0	0.4	0	3.1	10.7	4.5	42	3.4	2.9	0.8	0	0	0	0	100
平ⅡC	0	0	0	0	0.4	26.1	7	43.3	0.9	1.8	2	2	2.6	11.9	100	
平Ⅲ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.7	3.6	70.7	21	100		

は他型式に比べてまんべんなく出土しており出土傾向が掴めないこと、平瓦ⅠB型式は出土総量自体が5kg未満と極端に少くないため、瓦窯4で焼成していたとは判断できない。

以上、今回の調査で得た資料から、瓦窯4で焼成していたと判断できる平瓦は平瓦ⅡC型式のみである。また、灰原各層から複数型式の平瓦が出土しているが、上記の判断から操業期間内に異なる型式の平瓦を焼成していたとは認め難い。瓦窯4で焼成された製品と認めうる瓦塊類は、軒平瓦、平瓦ⅡC型式、博C型式、鷲尾となる。

・瓦窯5の製品

瓦窯5の前庭部埋土から出土した瓦塊類は、丸瓦Ⅰ型式、平瓦ⅠA b・ⅡC・Ⅲ型式である。このうち平瓦Ⅲ型式は出土比率で77.6%、層位ごとの出土比率でも前庭部で70.7%を占める。しかも、瓦窯3・4に隣接する層位からは一切出土していない。平瓦Ⅲ型式は瓦窯5で焼成されたと考えられる。

なお、1度の改築が確認されているが、燃焼室隔壁及び分焰柱でも平瓦Ⅲ型式が用いられている。当初から存在する内部構造の一部にその瓦窯の製品が使われていることから、操業当初から平瓦Ⅲ型式を焼成していた可能性が高い。

・その他の瓦窯の製品

今回出土した瓦塊類で、焼成された瓦窯が特定できていないものは、軒丸瓦ⅠB・ⅡA型式と型式未設定のもの(第6図6・7)、平瓦ⅠA b・B・F型式、博C型式で、これらは今回検出した以外の瓦窯で焼成されたものと考えられる。今回検出した以外の瓦窯を、「その他の瓦窯」とする。先に見た結果を踏まえて、いずれの時期に操業していた瓦窯の製品であるかを想定する。なお、この作業で未確認の瓦窯の存在を、ある程度推測することが可能といえる。その他の瓦窯を操業時期で区分すると以下のようになる。

①瓦窯3操業開始以前の瓦窯

②瓦窯3～5と操業期間が重複する瓦窯

③瓦窯5廃止後の瓦窯

①の瓦窯で焼成されていた可能性のある瓦塊類は、平瓦ⅠA b・B・F型式である。平瓦ⅠA b型式は、出土総量66.75kgで出土量が平瓦ⅡC・Ⅲ型式に次いで多い。S D01や燃焼部隔壁で高い出土比率を示すがその他の層位でもまんべんなく出土している。海会寺伽藍内部の調査で高い出土比率を占めていることから創建瓦とされている型式である。以上を併せて

考慮すると、①の瓦窯で生産されたと考えるのが妥当と言えよう。平瓦ⅠB・F型式も、出土総量が1kg未満と極端に少ないので、ⅠA b型式と似たような出土傾向を示すことから、あえて判断するなら①の瓦窯で焼成された可能性が指摘できる。

なお、軒丸瓦ⅠB・ⅡA型式と型式未設定のもの(第6図6・7)は、少なくとも①か②の瓦窯で生産されたものであることは確かである。ただ、今回の資料ではいずれの瓦窯で焼成されたもののかを特定し難い。

③の瓦窯で焼成された可能性が想定できる瓦塊類は、今回出土した瓦塊類にはみあたらない。

第2節 瓦窯・瓦塊類の年代

瓦塊類各型式の前後関係を、先にみた各瓦窯の製品から判断する。各瓦窯間には層位的な前後関係があるため、各瓦窯で焼成された製品群がおおまかな指標となる。なお、博A2型式はS D01埋土から出土したのみであり、どの時期の瓦窯に当てはめることもできない。今回の調査成果からでは時期は不明。ただ、海会寺の調査では出土した博の大半を占めることから、創建時に生産されたものといえる。よって瓦窯3以前の瓦窯で焼成されたものと判断した。各瓦窯の操業時期単位でまとめるに以下の通りとなる。

①期 瓦窯3以前の瓦窯の製品(と考えられる)

軒丸瓦ⅠB・ⅡA・型式未設定のもの
平瓦ⅠA b・B・F型式、博A2型式

②期 瓦窯3の製品(と考えられる)

軒丸瓦ⅠB・ⅡA・型式未設定のもの
平瓦ⅡA・B型式

③期 瓦窯4の製品

軒平瓦、平瓦ⅡC型式、博C型式、鷲尾

④期 瓦窯5の製品

平瓦Ⅲ型式

各期の年代の定点となる資料がある。瓦窯4で焼成された軒平瓦を平城宮式6663型式の範囲で捉えるならば、③期は、8世紀第2四半期以降となる。④期の下限を示すS D01の上部(最上層)から出土した上器のうちもっと新しい年代を示すのは、黒色土器(第24図43)で、10世紀後半代ごものである。また、海会寺の創建当時の瓦窯は今回の調査では確認されていない。創建当時の瓦塊類は①期に含まれるので①期は7世紀第3四半期以降となる。以上を考慮すると各瓦窯と瓦塊類の年

代は以下のように想定できる。

- | | |
|--------|------------|
| ①期 | 7世紀第3四半期以降 |
| ②期 瓦窯3 | |
| ③期 瓦窯4 | 8世紀第2四半期以降 |
| ④期 瓦窯5 | 10世紀後半代以前 |

第3節 既往の調査成果との関連

①期

海会寺創建瓦(軒丸瓦 I A型式)が、百济大寺に比定される大和吉備池廃寺や摂津西天寺と同範であることは先に述べた。改范や範詰の方法、瓦当厚が分厚いことなどにより、海会寺例が後出することは確実である。先行する二寺の造営過程を手がかりに軒丸瓦 I A型式に年代を与えると、西暦650年頃に金堂の造営が始まったと考えられるのである。

塔には軒丸瓦 I B型式と II A型式が併う。I B型式は素文様であることを除けば、I A型式の文様構成をほぼ忠実に模倣する。I B型式には中房断面が半球状を呈し高い蓮子を作うものと、それを改范した中房断面が方形を呈し低い蓮子を作うものがあり、前者では I A型式改范後の製品にみられるように、蓮子部分より範詰を行なっている。このように I B型式には I A型式の強い影響が観察され、I A型式とそれほどの時期差があるとは考えられない。また川原寺式軒丸瓦(II A型式)は、飛鳥川原寺所用軒丸瓦と文様構成が細部にわたって共通することから、天智元(662)年から天武2(673)年の間、中でも天智6(667)年の大津還都までと考えられる川原寺の創建年代からさほど下らない年代が与えられる。

海会寺の古代軒瓦は今述べた2種3型式にほぼ限定される。つまり軒瓦の年代観による限り、海会寺の創建は西暦650年以降、670年をさほど下らない時期に限定されるのである。前節で設定した①期である。

①期の遺構としては、金堂、塔、講堂の基壇、及び講堂基壇下層より確認された瓦窯群と鍛冶炉群がある。このうち瓦窯1の床面からは平瓦 I A a型式と I A c型式が出土している。これらは今回の調査ではまったく出土しておらず、また他の平瓦 I型式の出土傾向を併せて考えると、今回確認された瓦窯群が、講堂下層の生産遺構とは時期的に隔離するものであることは確実である。

②期

瓦窯3が操業していた時期である。瓦窯3では平瓦 II A、B型

式を焼成していたことが判明した。ただ瓦窯3では時期的に指標となる遺物が得られておらず、該当する資料だけで実年代を想定することは難しい。瓦窯4で焼成されたことが確実な軒平瓦が8世紀中頃以降と考えられるので、瓦窯3はそれを遅り、なおかつ①期に重ならない時期が与えられる。ここでは8世紀初頭から8世紀中頃までを想定しておきたい。

③期

瓦窯4において軒平瓦、平瓦 II C型式、鷲尾などを焼成していた。平瓦 II C型式は、寺域の調査において西面回廊基壇下の整地層より出土している。この整地層は大きく2つに分かれ、下層には軒丸瓦 I A型式、上層には軒丸瓦 I B、II A型式、平瓦 II C型式が含まれる。今回、平瓦 II C型式には3世紀第2四半期以降という年代が与えられたことから、西面回廊の造営年代が大幅に下る可能性が出てきた。

寺域では平瓦 II C型式の出土は少なく、差換瓦として認定される。先にみたように西面回廊の造営が8世紀後半まで下るならば、その屋瓦には平瓦 II C型式が主体的に含まれるはずであり、それに見合うだけの出土量にならないのは不自然である。他に③期に属する遺構としては寺院東側の集落域において、集落全期をとおして最大のSB210を主殿とする掘立柱建物群がある。これらの性格については諸説あるが、この時期に大規模な建物群を擁する主体が海会寺を掌握していたことは疑いない。あくまでも推測の域を出ないが、彼らは創建以来一世紀を経た伽藍の修復を積極的に行なったのではないだろうか。特に西面回廊下の整地層は厚さ2mにも及ぶものであり、整地土の流出なども起こりえただろう。そうした箇所を補修した際に、平瓦 II C型式が含まれたとしても何ら問題はない。また瓦窯4において古式の鷲尾を焼成していることから、伽藍修復が大規模なものであったと捉えることが出来るのではないだろうか。

④期

瓦窯5排水溝出土の遺物より10世紀後半代以前とした。しかし平瓦 III型式を焼成していることや、その他の出土遺物の様相から考えると瓦窯5の操業はそこまでは下らない。瓦窯5燃焼室裏土から出土した複弁型式の軒丸瓦は文様構成からは8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられそうだ。搬入品である可能性もあるが、瓦窯5の操業時期の一端を示すものと考えても大過ないものと考えられる。

なお寺院東側の集落域では9世紀前葉の消滅を経て、10世紀後半には再び数棟の掘立柱建物群が建てられる。排水溝より出土した黒色土器などについても、そうした活動と一連のものであると捉えておきたい。また寺域西隣「船荷山」にて確認された瓦窯2については詳細が明らかでないが、平窯という形態を探ることから瓦窯5と同時期に属する可能性がある。

今回の調査では、8世紀代初頭よりおよそ一世紀にわたって断続的に瓦生産を行っていた瓦窯群の様子が判明した。古代海会寺の維持管理を知るうえで貴重な資料である。また今回新たに出土した軒瓦は、いずれも寺域からは出土していない。これらは他所の寺院へと供給していた可能性もあり、瓦窯

の実態解明に欠かせない資料である。今のところ同范例は知らないが、今後の資料増加を待って検討したい。

註釈

- ①広瀬和豊 「丸・平瓦」「海会寺」泉南市教育委員会 (1987)
- ②飼田武蔵 「埴」「海会寺」泉南市教育委員会 (1987)
- ③奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所基準資料 II」(1975)
- ④森 雅 「黒色土器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会 (1995)
- ⑤広瀬和豊 「海会寺墓跡の構造」「海会寺」泉南市教育委員会 (1987)
- ⑥小沢 肇 「吉備桃源寺の発掘調査」「佛教叢書」235号 毎日新聞社 (1997)
- ⑦大庭 勝 「吉備寺跡ならずかたー『宮内官四号』の比定に関連してー」「文化財叢書 II 奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 回顧録」(1996)
- ⑧奈良国立文化財研究所 「那原守免解説を報告」(1960)
- ⑨広瀬和豊 「海会寺墓跡の構造」「海会寺」泉南市教育委員会 (1987)
- 齋藤 伸哉 「園内における表施寺院の様相」「古代」第110号 平福田大学考古学会 (2001)
- ⑩大島 浩 「恐尾の変遷」「瓦格・瓦尾」東京国立博物館 (2002)

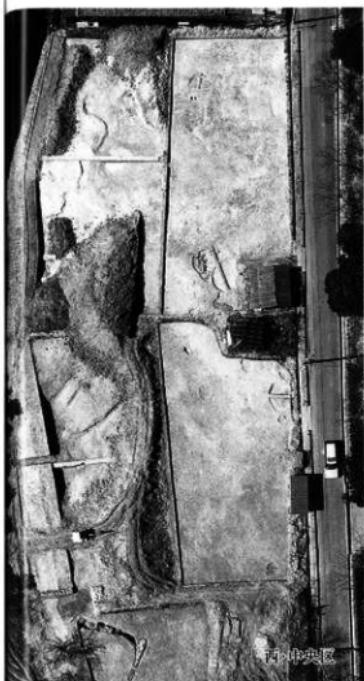


写真1 調査区垂直写真

報告書抄録

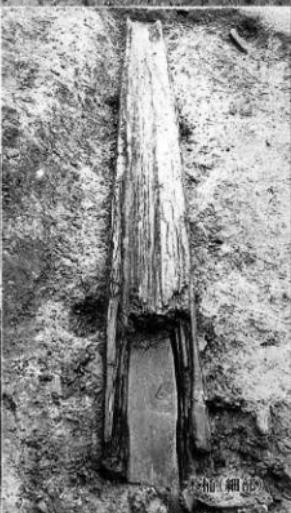
ふりがな	かいえじあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	海会寺跡発掘調査報告書
副書名	埋蔵文化財センター建設に伴う瓦窯の調査
巻次	-
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書
シリーズ番号	第41集
編著者名	城野博文・河田泰之
発行機関	泉南市教育委員会
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市櫛井1-1-1
発行年月日	2003年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡					
かいえじあと	おおさかんせんなんし		KAI	34° 22' 20"	135° 17' 30"	1994年12月 1995年7月		埋蔵文化財 センター建 設
海会寺跡	大阪府泉南市	27228					2600	
かいえじがよう 海会寺瓦窯	しんだちめいしら 信達大苗代		KAIG					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
海会寺瓦窯 1・2・3号窯	生産	7世紀～12世紀	瓦窯	瓦塊類・須恵器・ 土師器		3基の瓦窯を検出。 うち2基が登窯、1基が平窯。飛鳥・奈良 時代以降、平安時代 以前に操業。海会寺 跡の瓦塊類を焼成。		
海会寺跡	寺院		土坑 谷	瓦塊類 瓦塊類・須恵器・ 土師器・木製品		被熱し赤変した飛 鳥・奈良時代の瓦と ともに、12世紀代の 平瓦が出土。	墨書き土器・木樋が出 土。木樋は谷を堰き 止めた堤防に設置。8 世紀代に埋没。	



PL. 2 西・中央区全景





PL. 4 瓦窯全景



瓦窯全景



同上



瓦窯 4 檢出狀況



瓦窯 5 檢出狀況



PL. 6 瓦窯 4-1





煙道付近



2次床面



同上 煙道

PL. 8 瓦窯 4 - 3





2. 大



[a] [b]



S-D01との位置関係



焚口付近



燃焼室埋土



燃焼室—焚口付近



同上



焼成室埋土



同上



燒成室側壁

圖上



圖上

圖上

燒成室側壁



燒成室側壁







1 次

分佈柱



同上(右)



同上(左)

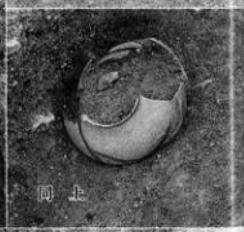
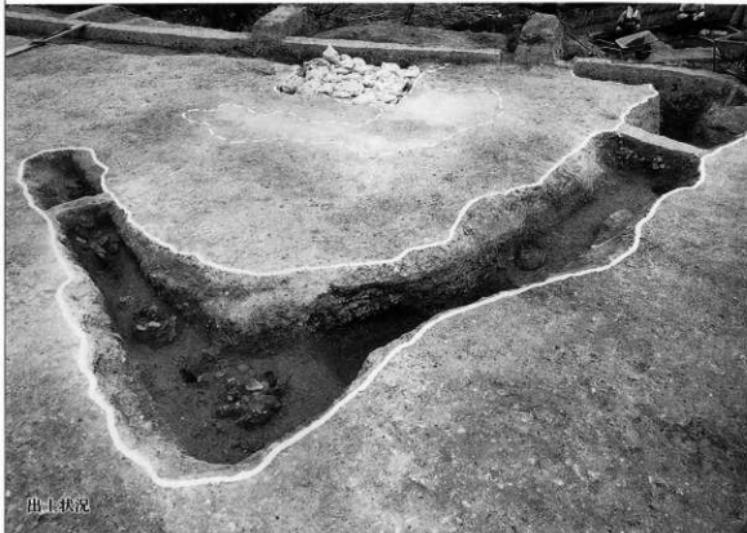
同上

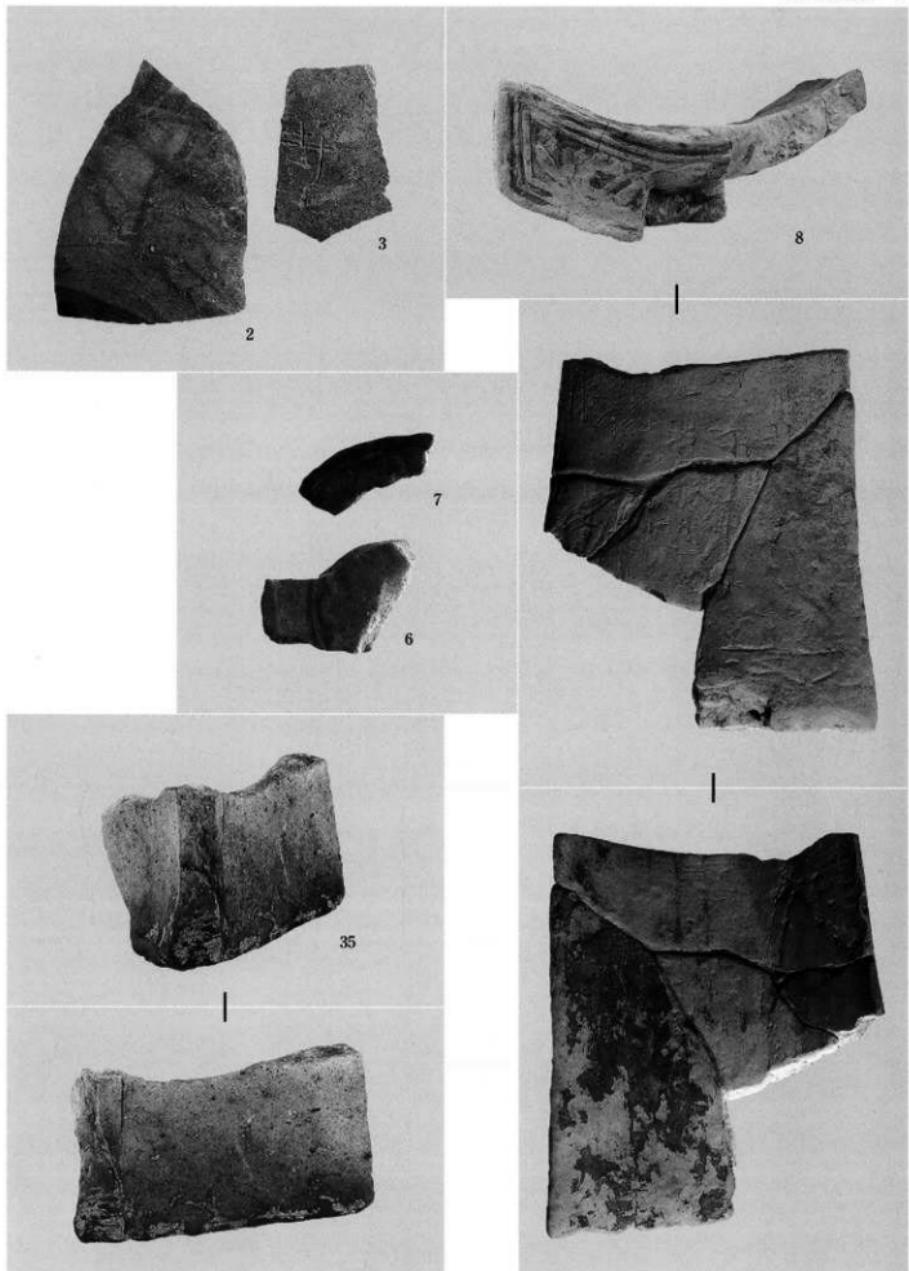


分佈柱



同上(右)







9



10



12



11



13





14



17



15

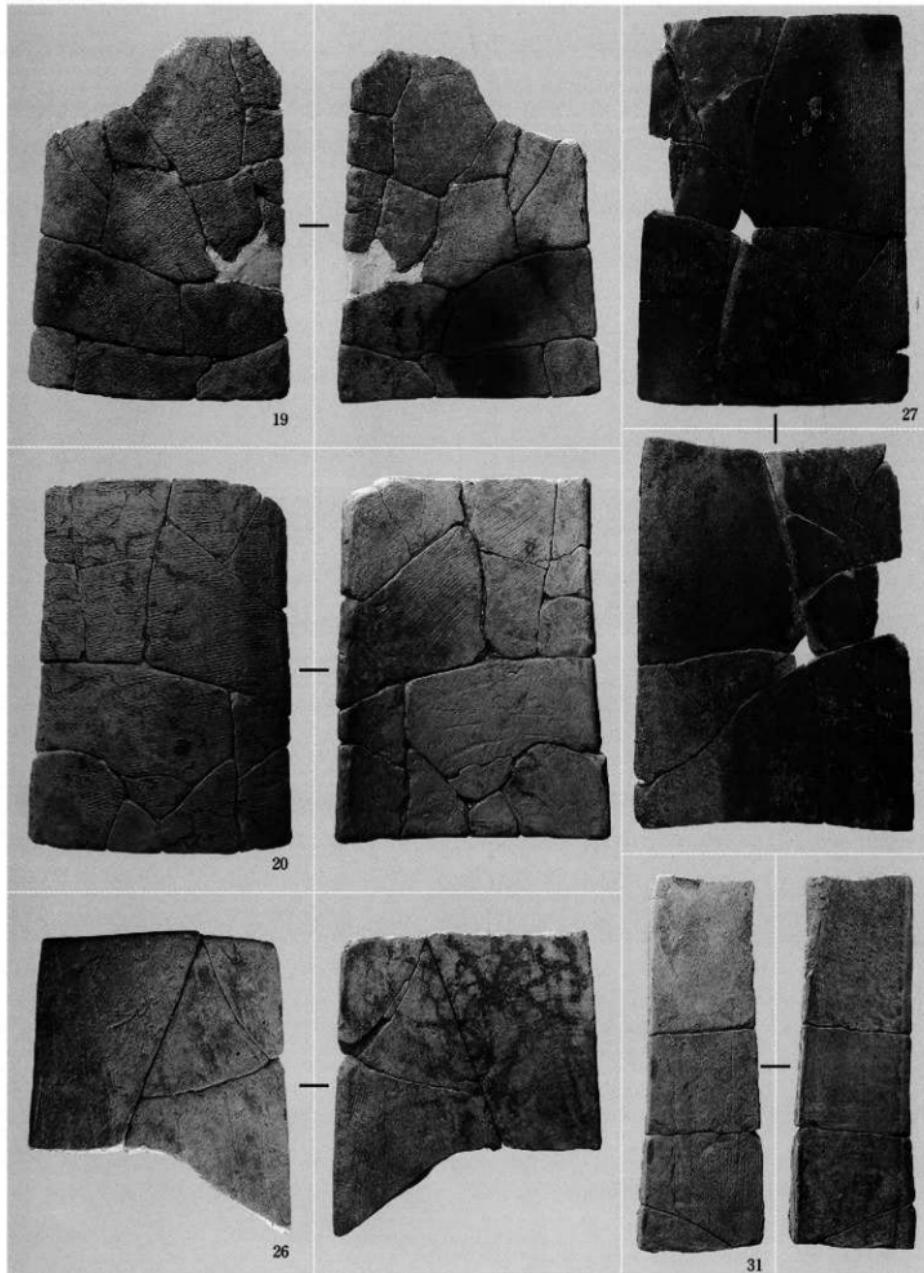


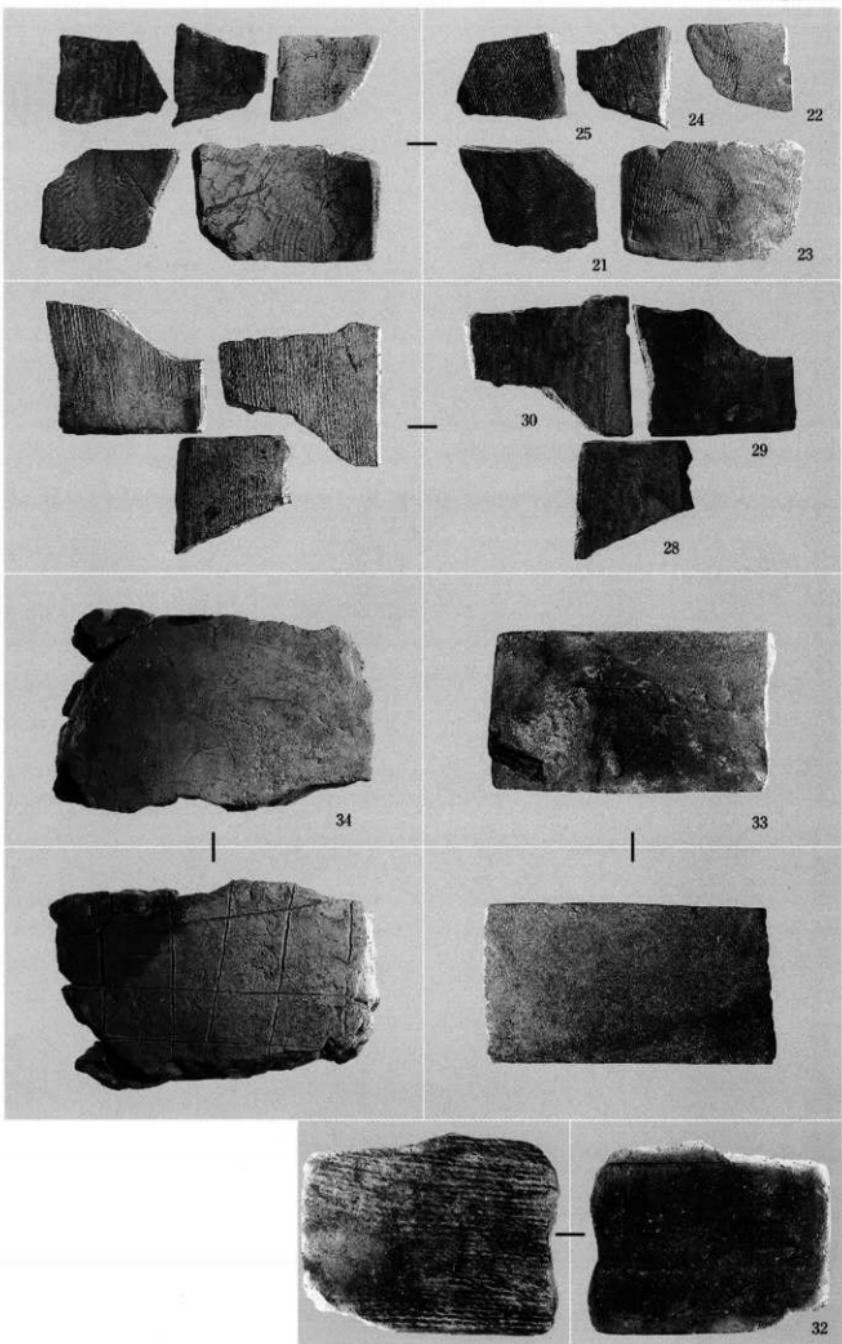
16

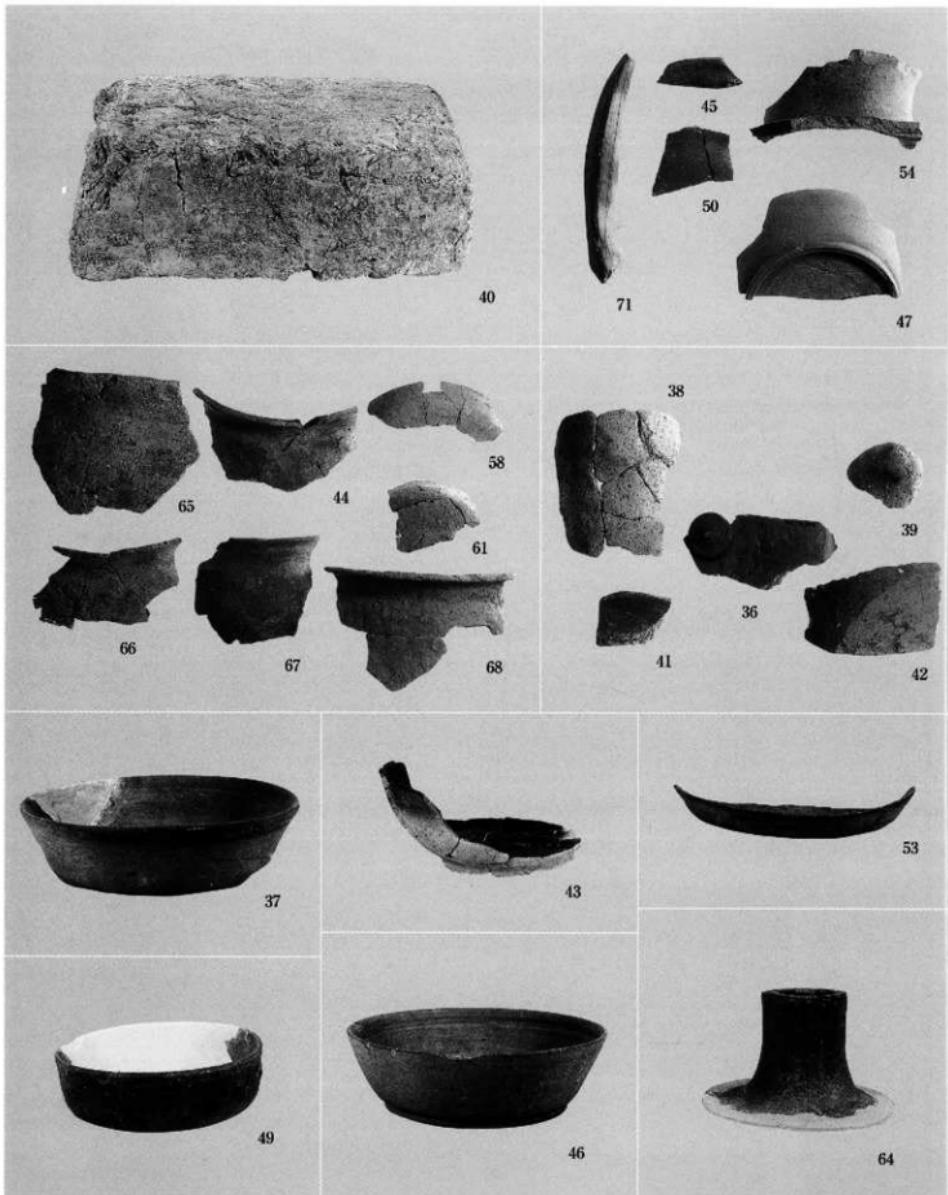


18









海会寺跡発掘調査報告書

－理数文化財センター建設に伴う瓦窯の調査－

泉南市文化財調査報告書 第41集

2003年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel.0724-83-0001

印 刷 有限会社 メノタ印刷工房

泉南市新家4509-4, 1-205

Tel.0724-80-2760

